

き こ ないちょう
木古内町

こう れん
幸連遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和3年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

き こ ないちょう
木古内町

こう れん
幸連遺跡

—高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和 3 年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



空撮 手前：幸連5遺跡 中央：幸連遺跡（西から）



空撮 幸連遺跡（北から）

カラー図版 2



P-9 土層断面 (西から)



P-17 土層断面 (北から)



P-24 土層断面 (南から)



P-24 遺物出土状況 (南から)



P-31 土層断面 (北から)



P-32 土層断面 (南から)



P-54 土層断面 (南東から)



P-66 土層断面 (西から)



P-73 土層断面（北から）



P-74 土層断面（南西から）



P-62 土層断面（東から）



P-62 漆製品（北東から）



P-62 漆製品（保存処理後）



MBPO-18 ~ 20・MBFC-13 出土状況（北から）



MB土層断面（北西から）



MC・H-6土層断面（南西から）

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局函館開発建設部が行う高規格幹線道路函館江差自動車道工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが、平成 29（2017）・平成 30（2018）年度に発掘調査を実施した木古内町幸連遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 平成 30（2018）・平成 31（2019）年 3 月に刊行した『調査年報 30』、『調査年報 31』の内容より、本書の内容が優先する。
3. 調査は平成 29（2017）・平成 30（2018）年度の 2 か年、第 2 調査部第 1 調査課が行い、整理は令和元（2019）年度に第 2 調査部第 1 調査課、令和 2（2020）・令和 3（2021）年度に第 1 調査部第 3 調査課が行った。
4. 整理作業は各遺構を各担当職員、土器を愛場和人、石器を鎌田望、愛場が行った。
5. 現場の写真は各担当職員、遺物の撮影は第 2 調査部第 1 調査課菊池慈人が行った。
6. 本書の編集は愛場が行い、文責は各項目の末尾に括弧で示した。
7. 放射性炭素年代測定、炭化樹種同定は（株）加速器分析研究所、黒曜石原産地分析は（株）パレオ・ラボ、漆製品の保存処理は（株）上田墨縄堂、漆製品の顔料分析はバリノ・サーヴェイに委託した（付篇）。
8. 報告書刊行後、遺物および台帳は木古内町教育委員会が、図面・写真フィルムなどの記録類は北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
9. 調査にあたっては、下記の諸機関および諸氏のご指導、ご協力をいただいた。（順不同、敬称略）
国土交通省北海道開発局函館開発建設部
北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
木古内町教育委員会：木元 豊
北斗市教育委員会（当時）：森 靖裕

記号等の説明

1. 遺構の表記は、以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号(盛土遺構はアルファベット)を付した。

H：堅穴住居跡 P：土坑(フラスコ状土坑含む) SP：小土坑 F：焼土

M：盛土遺構 他に遺構は埋設土器がある

付属遺構は以下の通り表記した。

HP：堅穴住居跡内の土坑 HSP：堅穴住居跡内の柱穴 HF：堅穴住居跡内の焼土

HPO：堅穴住居跡内の土器集中 HFC：堅穴住居跡内の剥片集中

PP：土坑内の小土坑 PD：土坑内の溝状土坑 PF：土坑内の焼土

PFC：土坑内の剥片集中

MF：盛土中の焼土 MPO：盛土中の土器集中 MFC：盛土中の剥片集中

2. 遺構図の縮尺は原則 40 分の 1 とし、盛土遺構の平面図・土層断面図は 100 分の 1 もしくは 200 分の 1 とした。いずれもスケールを付し、遺構平面図には方位記号を付した。方位は真北で、グリッドの南北ラインに対し東へ 10.8 度傾いている。遺構平面図の「+ (十字) と記号」はグリッド名で、遺構平面図等の「・ (ドット) と数字」は、その地点の標高 (m) を表す。

3. 本文及び図表中での遺構の規模は次の要領で示した。また一部破壊されているものは、現存する計測値を括弧付きで示した。

掘り込みのある遺構：確認面の長径×短径/床面・坑底面の長径×短径/確認面からの最大深 (m)

平面的な遺構：範囲の長径×短径/確認面からの最大深 (m)

柱穴・杭穴：確認面の長径×底面の長径/確認面からの最大深 (m)

4. 遺物図の縮尺は、復元土器 (図上復元含む)：4 分の 1、拓本土器：3 分の 1、剥片石器・石製品：2 分の 1、礫石器：3 分の 1 (大型のもの 4 分の 1) とし、スケールを付した。復元土器、石器等の計測値は、欠損部分がある場合、現存長に括弧を付して示した。

目 次

カラー図版	
例言	
記号等の説明	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 章 緒 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯・経過	2
(1) 函館江差自動車道の調査の経緯	
(2) 幸連遺跡の調査の経緯	
(3) 調査の経過	
4. 調査成果の概要	4

II 章 遺跡の立地と環境

1. 立地と環境	7
(1) 立地	
(2) 幸連とボンクレ川	
(3) 遺跡の現況	
2. 周辺の遺跡	8

III 章 調査の概要

1. 発掘区の設定	15
2. 基本土層	16
3. 調査の方法	17
4. 整理の方法	17
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 遺物の分類基準	19

IV 章 遺 構

1. 概 要	21
2. 竪穴住居跡	21

3. 土 坑	46
P-1 ~ 104	
4. 小土坑	154
SP-1 ~ 164	
5. 焼 土	154
F-1 ~ 18	
6. 埋設土器	168
埋設土器 1 ~ 6	
7. 盛土遺構	170
MA・MB・MC・MD	
V章 遺構・包含層の出土遺物	
1. 概 要	205
2. 土器等	205
(1) 遺構出土の土器等	
(2) 包含層出土の土器	
3. 石器等	258
(1) 遺構出土の石器等	
(2) 包含層出土の石器等	
4. 漆製品	272
VI章 まとめ	373
付篇 自然科学的分析	383
1. 幸連遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)	(株) 加速器分析研究所
2. 幸連遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	(株) バレオ・ラボ
3. 幸連遺跡から出土した炭化材の樹種	(株) 加速器分析研究所
4. 幸連遺跡出土の漆製品の顔料分析	(株) バリノ・サーヴェイ
5. 幸連遺跡出土漆製品の保存処理	(株) 上田墨縄堂ほか
写真図版	
引用参考文献	
報告書抄録	

図目次

図Ⅰ-1	遺構位置図	4	図Ⅳ-29	P-15・P-16	61
図Ⅱ-1	遺跡の位置と木古内町の地形	9	図Ⅳ-30	P-17	63
図Ⅱ-2	周辺の地形	9	図Ⅳ-31	P-18・P-19	65
図Ⅱ-3	周辺の地形（明治期・大正期）	10	図Ⅳ-32	P-20	67
図Ⅱ-4	木古内町の遺跡	11	図Ⅳ-33	P-21	68
図Ⅱ-5	幸連遺跡周辺の地形	12	図Ⅳ-34	P-22	69
図Ⅲ-1	発掘区設定図	15	図Ⅳ-35	P-23	71
図Ⅲ-2	調査区の土層	16	図Ⅳ-36	P-24（1）	72
図Ⅲ-3	調査の方法	18	図Ⅳ-37	P-24（2）	73
図Ⅳ-1	遺構位置図	22	図Ⅳ-38	P-25	75
図Ⅳ-2	H-1	23	図Ⅳ-39	P-26・P-27・P-29（1）	77
図Ⅳ-3	H-2（1）	25	図Ⅳ-40	P-29（2）・P-30	79
図Ⅳ-4	H-2（2）	26	図Ⅳ-41	P-31・P-32（1）	80
図Ⅳ-5	H-2（3）	27	図Ⅳ-42	P-32（2）	81
図Ⅳ-6	H-3（1）	28	図Ⅳ-43	P-33	83
図Ⅳ-7	H-3（2）	29	図Ⅳ-44	P-34・P-35・P-36	85
図Ⅳ-8	H-3（3）	31	図Ⅳ-45	P-37	86
図Ⅳ-9	H-4（1）	32	図Ⅳ-46	P-38	87
図Ⅳ-10	H-4（2）	33	図Ⅳ-47	P-39・P-40（1）	89
図Ⅳ-11	H-5（1）	34	図Ⅳ-48	P-40（2）	91
図Ⅳ-12	H-5（2）	35	図Ⅳ-49	P-41・P-42	92
図Ⅳ-13	H-6（1）	37	図Ⅳ-50	P-43・P-44	93
図Ⅳ-14	H-6（2）	39	図Ⅳ-51	P-45	95
図Ⅳ-15	H-7（1）	40	図Ⅳ-52	P-46・P-47	97
図Ⅳ-16	H-7（2）	41	図Ⅳ-53	P-48・P-49	99
図Ⅳ-17	H-8	43	図Ⅳ-54	P-50・P-51・P-52	101
図Ⅳ-18	H-9（1）	44	図Ⅳ-55	P-53	102
図Ⅳ-19	H-9（2）	45	図Ⅳ-56	P-54	103
図Ⅳ-20	H-9（3）・H-10	47	図Ⅳ-57	P-55・P-56	105
図Ⅳ-21	P-1・P-2（1）	49	図Ⅳ-58	P-57・P-58（1）	107
図Ⅳ-22	P-2（2）・P-3	51	図Ⅳ-59	P-58（2）・P-59	109
図Ⅳ-23	P-4・P-5	52	図Ⅳ-60	P-60・P-61	110
図Ⅳ-24	P-6・P-7	53	図Ⅳ-61	P-62（1）	111
図Ⅳ-25	P-8・P-9（1）	55	図Ⅳ-62	P-62（2）	113
図Ⅳ-26	P-9（2）・P-10	57	図Ⅳ-63	P-63・P-64	115
図Ⅳ-27	P-11・P-12	59	図Ⅳ-64	P-65	116
図Ⅳ-28	P-13・P-14	60	図Ⅳ-65	P-66	117

図IV-66	P-67	119	図IV-106	MB (4)	175
図IV-67	P-68・P-69	121	図IV-107	MB (5)	177
図IV-68	P-70・P-71	122	図IV-108	MB (6)	178
図IV-69	P-72	123	図IV-109	MB (7)	179
図IV-70	P-73・P-74	125	図IV-110	MB (8)	180
図IV-71	P-75・P-76	127	図IV-111	MB (9)	181
図IV-72	P-78・P-79	129	図IV-112	MB (10)	182
図IV-73	P-80・P-81	131	図IV-113	MB (11)	183
図IV-74	P-82	133	図IV-114	MB (12)	184
図IV-75	P-83・P-84	134	図IV-115	MB (13)	185
図IV-76	P-85・P-86	135	図IV-116	MB (14)	186
図IV-77	P-87・P-88 (1)	137	図IV-117	MB (15)	187
図IV-78	P-88 (2)	138	図IV-118	MC (1)	188
図IV-79	P-89	139	図IV-119	MC (2)	189
図IV-80	P-90・P-91	141	図IV-120	MC (3)	190
図IV-81	P-92・P-93	143	図IV-121	MC (4)	191
図IV-82	P-94・P-95 (1)	145	図IV-122	MD	193
図IV-83	P-95 (2)・P-96	147	図V-1	盛土遺構の遺物分布図 (1)	222
図IV-84	P-97・P-98	148	図V-2	盛土遺構の遺物分布図 (2)	223
図IV-85	P-99・P-100	149	図V-3	盛土遺構の遺物分布図 (3)	224
図IV-86	P-101・P-102	151	図V-4	盛土遺構の遺物分布図 (4)	225
図IV-87	P-103・P-104	153	図V-5	包含層の遺物分布図 (1)	226
図IV-88	SP-1 ~ 164 位置図	155	図V-6	包含層の遺物分布図 (2)	227
図IV-89	調査区西側のSP集中区 (1)	156	図V-7	包含層の遺物分布図 (3)	228
図IV-90	調査区西側のSP集中区 (2)	157	図V-8	竪穴住居跡出土の土器 (1)	229
図IV-91	SP-1 ~ 31 土層断面図	158	図V-9	竪穴住居跡出土の土器 (2)	230
図IV-92	SP-32 ~ 73 土層断面図	159	図V-10	竪穴住居跡出土の土器等 (3)・ 土坑出土の土器 (1)	231
図IV-93	SP-74 ~ 99 土層断面図	160	図V-11	土坑出土の土器 (2)	232
図IV-94	SP-100 ~ 119 土層断面図	161	図V-12	土坑出土の土器 (3)	233
図IV-95	SP-120 ~ 139 土層断面図	162	図V-13	土坑出土の土器 (4)	234
図IV-96	SP-140 ~ 164 土層断面図	163	図V-14	土坑出土の土器 (5)	235
図IV-97	F-1 ~ 4	164	図V-15	土坑出土の土器 (6)	236
図IV-98	F-5 ~ 11	165	図V-16	土坑出土の土器 (7)	237
図IV-99	F-12 ~ 16	166	図V-17	土坑出土の土器 (8)	238
図IV-100	F-17・18・埋設土器1・2	167	図V-18	土坑出土の土器 (9)	239
図IV-101	埋設土器3 ~ 6	169	図V-19	土坑出土の土器 (10)	240
図IV-102	MA	171	図V-20	土坑出土の土器 (11)	241
図IV-103	MB (1)	172	図V-21	土坑出土の土器 (12)	242
図IV-104	MB (2)	173	図V-22	土坑出土の土器 (13)	243
図IV-105	MB (3)	174			

図V-23	土坑出土の土器 (14).....	244	図V-61	土坑出土の石器等 (20).....	297
図V-24	土坑出土の土器 (15).....	245	図V-62	土坑出土の石器等 (21).....	298
図V-25	土坑出土の土器 (16)・SP・ 埋設土器 (1).....	246	図V-63	土坑出土の石器等 (22).....	299
図V-26	埋設土器 (2).....	247	図V-64	土坑出土の石器等 (23).....	300
図V-27	盛土遺構出土の土器 (1) MB.....	248	図V-65	土坑出土の石器等 (24).....	301
図V-28	盛土遺構出土の土器 (2) MB.....	249	図V-66	土坑出土の石器等 (25).....	302
図V-29	盛土遺構出土の土器 (3) MB.....	250	図V-67	土坑出土の石器等 (26).....	303
図V-30	盛土遺構出土の土器 (4) MB.....	251	図V-68	土坑出土の石器等 (27).....	304
図V-31	盛土遺構出土の土器 (5) MB.....	252	図V-69	土坑出土の石器等 (28).....	305
図V-32	盛土遺構出土の土器 (6) MB.....	253	図V-70	土坑出土の石器等 (29).....	306
図V-33	盛土遺構出土の土器 (7) MB.....	254	図V-71	土坑出土の石器等 (30).....	307
図V-34	盛土遺構出土の土器 (8) MC.....	255	図V-72	土坑出土の石器等 (31).....	308
図V-35	盛土遺構出土の土器 (9) MC・MD.....	256	図V-73	土坑出土の石器等 (32).....	309
図V-36	包含層出土の土器.....	257	図V-74	土坑出土の石器等 (33).....	310
図V-37	竪穴住居跡出土の石器等 (1).....	273	図V-75	土坑出土の石器等 (34).....	311
図V-38	竪穴住居跡出土の石器等 (2).....	274	図V-76	土坑出土の石器等 (35).....	312
図V-39	竪穴住居跡出土の石器等 (3).....	275	図V-77	土坑出土の石器等 (36).....	313
図V-40	竪穴住居跡出土の石器等 (4).....	276	図V-78	土坑出土の石器等 (37)・ SP出土の石器等.....	314
図V-41	竪穴住居跡出土の石器等 (5).....	277	図V-79	盛土遺構出土の石器等 (1) MB.....	315
図V-42	土坑出土の石器等 (1).....	278	図V-80	盛土遺構出土の石器等 (2) MB.....	316
図V-43	土坑出土の石器等 (2).....	279	図V-81	盛土遺構出土の石器等 (3) MB.....	317
図V-44	土坑出土の石器等 (3).....	280	図V-82	盛土遺構出土の石器等 (4) MB.....	318
図V-45	土坑出土の石器等 (4).....	281	図V-83	盛土遺構出土の石器等 (5) MB.....	319
図V-46	土坑出土の石器等 (5).....	282	図V-84	盛土遺構出土の石器等 (6) MC.....	320
図V-47	土坑出土の石器等 (6).....	283	図V-85	盛土遺構出土の石器等 (7) MC・MD.....	321
図V-48	土坑出土の石器等 (7).....	284	図V-86	遺構出土の接合資料 (1).....	322
図V-49	土坑出土の石器等 (8).....	285	図V-87	遺構出土の接合資料 (2).....	323
図V-50	土坑出土の石器等 (9).....	286	図V-88	遺構出土の接合資料 (3).....	324
図V-51	土坑出土の石器等 (10).....	287	図V-89	遺構出土の接合資料 (4).....	325
図V-52	土坑出土の石器等 (11).....	288	図V-90	遺構出土の接合資料 (5).....	326
図V-53	土坑出土の石器等 (12).....	289	図V-91	遺構出土の接合資料 (6).....	327
図V-54	土坑出土の石器等 (13).....	290	図V-92	包含層出土の石器等 (1).....	328
図V-55	土坑出土の石器等 (14).....	291	図V-93	包含層出土の石器等 (2).....	329
図V-56	土坑出土の石器等 (15).....	292	図V-94	包含層出土の石器等 (3).....	330
図V-57	土坑出土の石器等 (16).....	293	図V-95	包含層出土の石器等 (4).....	331
図V-58	土坑出土の石器等 (17).....	294	図V-96	P-62 出土の漆製品.....	332
図V-59	土坑出土の石器等 (18).....	295	図VI-1	プラスチック状土坑の断面形状.....	373
図V-60	土坑出土の石器等 (19).....	296	図VI-2	遺構変遷図 (1).....	374

図VI-3 遺構変遷図 (2).....	375	図VI-6 円筒土器下層式集成図 (3).....	380
図VI-4 円筒土器下層式集成図 (1).....	378	図VI-7 円筒土器下層式集成図 (4).....	381
図VI-5 円筒土器下層式集成図 (2).....	379		

表目次

表I-1 遺構一覧.....	4	表V-2 包含層出土遺物一覧.....	349
表I-2 遺物点数一覧.....	5	表V-3 遺構出土の掲載復元土器一覧 (1) ~ (4)	350
表II-1 木古内町発掘調査遺跡一覧 (1)・(2).....	13	表V-4 遺構出土の掲載破片土器一覧 (1) ~ (9)	354
表IV-1 竪穴住居跡と付属遺構の規模一覧 (1)・(2).....	194	表V-5 包含層出土の掲載復元一覧.....	363
表IV-2 土坑と付属遺構の規模一覧 (1) ~ (3)	195	表V-6 包含層出土の掲載破片土器一覧.....	363
表IV-3 小土坑の規模一覧 (1) ~ (4).....	198	表V-7 遺構出土の掲載石器等一覧 (1) ~ (7)	364
表IV-4 焼土の規模一覧.....	201	表V-8 遺構出土の掲載接合資料一覧 (1)・(2)	370
表IV-5 埋設土器の規模一覧.....	201	表V-9 包含層出土の掲載石器等一覧.....	372
表IV-6 盛土遺構と付属遺構の規模一覧 (1)・(2).....	202	表V-10 遺構出土の掲載漆製品一覧.....	372
表V-1 遺構出土遺物一覧 (1) ~ (17).....	333		

写真図版目次

図版 1

- 空撮 平成 29 年度調査状況（南から）
空撮 平成 30 年度調査前状況（北から）

図版 2

- H-1 土層断面（南から）
H-1 HF-1 検出（南から）
H-1 HF-1 土層断面（西から）
H-1 完掘（南から）

図版 3

- H-2 土層断面（南東から）
H-2 HF-1 土層断面（西から）
H-2 SP-2 土層断面（南から）
H-2 床面炭化材出土状況（北東から）

図版 4

- H-3 土層断面（南西から）
H-3 遺物出土状況（南から）
H-3 HSP-1（南東から）
H-3 出入口構造（西から）
H-3 北側完掘（北から）

図版 5

- H-4 土層断面（南から）
H-4 HF-1 土層断面（東から）
H-4 HSP-1（南西から）
H-4 HSP-5（西から）
H-4 遺物出土状況（西から）

図版 6

- H-5 土層断面（西から）
H-5 HF-1 土層断面（西から）
H-5 HSP-6・7 土層断面（北東から）
H-5 HSP-1（西から）
H-5 HSP-3（西から）
H-5 HSP-8（南西から）
H-5 完掘（西から）

図版 7

- H-6 土層断面（南西から）
H-6 覆土中遺物出土状況（北から）
H-6 覆土中遺物出土状況（南東から）

- H-6 HF-1 土層断面（南から）

- H-6 HSP-1（南西から）

- H-6 HSP-2（南から）

- H-6 完掘（南東から）

図版 8

- H-7 土層断面（北西から）
H-7 覆土中遺物出土状況（北から）
H-7 HSP-2（北から）
H-7 HSP-4（南西から）
H-7 HSP-5（南から）
H-7 完掘（北から）

図版 9

- H-8 土層断面（東から）
H-8 HSP-1（南から）
H-8 HSP-2（南から）
H-8 HSP-1～3（西から）
H-8 完掘（北から）

図版 10

- H-9 土層断面（南東から）
H-9 ベンチ構造部分土層断面（南東から）
H-9 HPO-1 出土状況（西から）
H-9 HF-1 土層断面（南東から）
H-9 HSP-5（南東から）
H-9 HSP-10（南東から）

図版 11

- H-9 完掘（南から）
H-10 完掘（南西から）

図版 12

- P-1 土層断面（北東から）
P-1 完掘（南西から）
P-2 土層断面（南から）
P-2 焼土・遺物出土状況（南西から）
P-3 土層断面（南西から）
P-3 完掘（南西から）
P-4 土層断面（南から）
P-4 完掘（南から）

図版 13

P-5 土層断面 (東から)
P-5 完掘 (東から)
P-6 土層断面 (西から)
P-6 遺物出土状況 (南西から)
P-7 土層断面 (西から)
P-7 遺物出土状況 (西から)
P-8 土層断面 (西から)
P-8 完掘 (北西から)

図版 14

P-9 土層断面 (西から)
P-9 完掘 (西から)
P-10 土層断面 (南東から)
P-10 完掘 (北から)
P-11 土層断面 (南から)
P-11 完掘 (南から)
P-12 土層断面 (北西から)
P-12 遺物出土状況 (西から)

図版 15

P-13 土層断面 (西から)
P-13 完掘 (西から)
P-14 土層断面 (北から)
P-14 完掘 (北から)
P-15 土層断面 (南西から)
P-15 完掘 (西から)
P-16 土層断面 (南西から)
P-16 完掘 (南から)

図版 16

P-17 土層断面 (北から)
P-17 炭化物・遺物出土状況 (北から)
P-18 土層断面 (南から)
P-18 完掘 (南から)
P-19 土層断面 (南から)
P-19 完掘 (南から)
P-20 土層断面 (南西から)
P-20 遺物出土状況 (南西から)

図版 17

P-21 土層断面 (北西から)
P-21 遺物出土状況 (北西から)
P-22 土層断面 (南から)
P-22 遺物出土状況 (西から)

P-23 土層断面 (南西から)
P-23 遺物出土状況 (南から)
P-24 土層断面 (南から)
P-24 遺物出土状況 (北から)
P-25 土層断面 (南東から)
P-25 遺物出土状況 (北東から)
P-26 土層断面 (東から)
P-26 完掘 (南東から)
P-27 土層断面 (東から)
P-27 完掘 (東から)
P-29 土層断面 (西から)
P-29 遺物出土状況 (北西から)

図版 19

P-30 土層断面 (南西から)
P-30 完掘 (南西から)
P-31 土層断面 (北から)
P-31 遺物出土状況 (北東から)
P-32 土層断面 (南から)
P-32 遺物出土状況 (南から)
P-33 土層断面 (南から)
P-33 遺物出土状況 (南から)

図版 20

P-34 土層断面 (南から)
P-34 遺物出土状況 (南から)
P-35 土層断面 (北西から)
P-35 完掘 (西から)
P-36 土層断面 (南から)
P-36 遺物出土状況 (南から)
P-37 土層断面 (北東から)
P-37 遺物出土状況 (西から)

図版 21

P-38 土層断面 (西から)
P-38 P-1 土層断面 (西から)
P-38 完掘 (西から)
P-39 土層断面 (西から)
P-39 完掘 (西から)

図版 22

P-40 土層断面 (南から)
P-40 完掘 (南から)

P-41 土層断面（東から）
P-41 完掘（東から）
P-42 土層断面（北西から）
P-42 完掘（北から）
P-43 土層断面（東から）
P-43 完掘（南東から）

図版 23

P-44 土層断面（西から）
P-44 完掘（南西から）
P-45 土層断面（東から）
P-45 遺物出土状況（東から）
P-46 土層断面（西から）
P-46 完掘（西から）
P-47 土層断面（北東から）
P-47 遺物出土状況（北東から）

図版 24

P-48 土層断面（北東から）
P-48 完掘（南西から）
P-49 土層断面（南から）
P-49 完掘（南西から）
P-50 土層断面（南から）
P-50 完掘（南から）
P-51 土層断面（西から）
P-51 遺物出土状況（北西から）

図版 25

P-52 土層断面（北東から）
P-52 完掘（北東から）
P-53 土層断面（南東から）
P-53 遺物出土状況（西から）
P-54 土層断面（南東から）
P-54 完掘（南から）
P-55 土層断面（西から）
P-55 遺物出土状況（西から）

図版 26

P-56 土層断面（南から）
P-56 遺物出土状況（東から）
P-57 土層断面（南東から）
P-57 完掘（南から）
P-58 土層断面（北東から）
P-58 完掘（北東から）

P-59 土層断面（東から）
P-59 完掘（東から）

図版 27

P-60 土層断面（北から）
P-60 完掘（北東から）
P-61 土層断面（西から）
P-61 完掘（西から）
P-62 土層断面（東から）
P-62 完掘（東から）
P-62 遺物出土状況（東から）
P-62 漆製品（北東から）

図版 28

P-63 土層断面（南から）
P-63 完掘（西から）
P-64 土層断面（南から）
P-64 完掘（南から）
P-65 土層断面（北から）
P-65 遺物出土状況（東から）
P-66 土層断面（西から）
P-66 遺物出土状況（西から）

図版 29

P-67 土層断面（南から）
P-67 完掘・P P-1 遺物出土状況（南から）
P-68 土層断面（西から）
P-68 焼土検出状況（西から）
P-69 土層断面（西から）
P-69 完掘（東から）
P-70 土層断面（北東から）
P-70 完掘（北東から）

図版 30

P-71 土層断面・完掘（北から）
P-72 土層断面（北西から）
P-72 遺物出土状況（西から）
P-72 完掘（西から）
P-73 土層断面（北から）
P-73 P P-1 土層断面（北から）
P-74 土層断面（南西から）
P-74 完掘（南から）

図版 31

P-75 土層断面（南から）

P-75 遺物出土状況 (南西から)
P-76 土層断面 (東から)
P-76 P P-1 溝状遺構検出状況 (東から)
P-78 土層断面 (南から)
P-78 遺物出土状況 (南東から)
P-79 土層断面 (南東から)
P-79 遺物出土状況 (西から)

図版 32

P-80 土層断面 (南東から)
P-80 完掘 (南から)
P-81 土層断面 (南から)
P-81 完掘 (北から)
P-82 土層断面 (南東から)
P-82 遺物出土状況 (南東から)
P-83 土層断面 (西から)
P-83 遺物出土状況 (南西から)

図版 33

P-84 土層断面 (南から)
P-84 完掘 (南東から)
P-85 土層断面 (南西から)
P-85 完掘 (東から)
P-86 土層断面 (南から)
P-86 遺物出土状況 (南西から)
P-87 完掘 (南西から)
P-87 P P-1 土層断面 (南西から)

図版 34

P-88 土層断面 (南から)
P-88 遺物出土状況 (南東から)
P-88 土器出土状況 (南西から)
P-88 完掘 (南東から)
P-89 土層断面 (南から)
P-89 遺物出土状況 (南から)
P-90 土層断面 (南から)
P-90 完掘 (南東から)

図版 35

P-91 土層断面 (南から)
P-91 完掘 (西から)
P-92 土層断面 (南から)
P-92 遺物出土状況 (南から)
P-93 土層断面 (南西から)

P-93 完掘 (南西から)
P-94 土層断面 (東から)
P-94 遺物出土状況 (南から)
P-95 土層断面 (南から)
P-95 遺物出土状況 (南から)
P-96 土層断面 (南から)
P-96 遺物出土状況 (南東から)
P-97 土層断面 (南から)
P-97 完掘 (北東から)
P-98 土層断面 (西から)
P-98 完掘 (北から)

図版 37

P-99 土層断面 (南から)
P-99 遺物出土状況 (南西から)
P-100 土層断面 (南から)
P-100 完掘 (南東から)
P-101 土層断面 (南西から)
P-101 完掘 (南から)
P-102 土層断面 (南西から)
P-102 遺物出土状況 (南から)

図版 38

P-103 上部土層断面 (西から)
P-103 下部土層断面 (西から)
P-103 遺物出土状況 (西から)
P-104 土層断面 (東から)
調査風景 (東から)

図版 39

S P-1・3・4 (南西から)
S P-2 土層断面 (北西から)
S P-5 完掘 (東から)
S P-6 完掘 (北西から)
S P-36 土層断面 (東から)
S P-38 土層断面 (南から)
S P-58 遺物出土状況 (南から)
S P-58・59 完掘 (南から)
S P-87・86 (南から)
S P-101 土層断面 (南から)
S P-132・133 完掘 (南西から)

図版 40

SP-135・136 完掘（東から）
SP-138 土層断面（西から）
SP-140 土層断面（南から）
SP-141 土層断面（北東から）
SP-148・149 土層断面（南から）
SP-150 土層断面（南西から）
SP-154 土層断面（南西から）
SP-155 土層断面（南西から）
SP-156 土層断面（南西から）

図版 41

F-13・14 土層断面（西から）
F-15 土層断面（南から）
埋設土器1 検出状況（南から）
埋設土器2 検出状況（南から）
埋設土器3 検出状況（北から）
埋設土器4 検出状況（南東から）
埋設土器5 検出状況（南西から）
埋設土器6 検出状況（西から）

図版 42

MA土層断面（南西から）
MB土層断面（調査区南側境）（北西から）
MB土層断面（南西から）
MBF-1 土層断面（南東から）
MBF-3 土層断面（西から）

図版 43

MB遺物出土状況（東から）
MBPO-15～17・MBFC-12 出土状況
（北東から）

図版 44

MBPO-18～20・MBFC-13 出土状況
（北から）
MBPO-33・34・MBFC-27 出土状況
（東から）
MBPO-35・36・MBFC-26 出土状況
（南西から）
MBPO-38・39・MBF-4 出土状況
（東から）

MBPO-40 出土状況（南東から）

図版 45

MBFC-8・9 出土状況（南西から）

MBFC-10 出土状況（南西から）
MBFC-14 出土状況（南東から）
MBFC-25 出土状況（西から）
MC土層断面H-6 付近（南西から）
MC土層断面H-7 付近（南西から）
MC土層断面15 ライン（南西から）

図版 46

MCPO-2 出土状況（西から）
MCPO-3 出土状況（北から）
MCPO-5 出土状況（北西から）
MCPO-6 出土状況（南から）
MCF-1 出土状況（北から）
MCF-3 出土状況（北から）
MC・H-6 調査風景（北から）

図版 47

MD土層断面（北から）
MD土層断面（H-8 覆土）（北西から）
MD調査風景（南から）

図版 48

遺構出土の土器（1）

図版 49

遺構出土の土器（2）

図版 50

遺構出土の土器（3）

図版 51

遺構出土の土器（4）

図版 52

遺構出土の土器（5）

図版 53

遺構出土の土器（6）

図版 54

遺構出土の土器（7）

図版 55

遺構出土の土器（8）

図版 56

遺構出土の土器（9）

図版 57

遺構出土の土器（10）

図版 58

遺構出土の土器（11）

図版 59

遺構出土の土器 (12)

図版 60

遺構出土の土器 (13)

図版 61

遺構出土の土器 (14)

図版 62

遺構出土の土器 (15)

図版 63

遺構出土の土器 (16)

図版 64

遺構出土の土器 (17)

図版 65

遺構出土の土器 (18)

図版 66

遺構出土の土器 (19)

図版 67

遺構出土の土器 (20)

図版 68

遺構出土の土器 (21)

図版 69

遺構出土の土器 (22)

図版 70

遺構出土の土器 (23)

図版 71

遺構出土の土器 (24)

図版 72

遺構出土の土器 (25)

図版 73

遺構出土の土器 (26)

図版 74

遺構出土の土器 (27)・包含層出土の土器 (1)

図版 75

遺構出土の土器 (28)

図版 76

遺構出土の土器 (29)

図版 77

遺構出土の土器 (30)

図版 78

遺構出土の土器 (31)

図版 79

遺構出土の土器 (32)

図版 80

遺構出土の土器 (33)

図版 81

遺構出土の土器 (34)

図版 82

遺構出土の土器 (35)

図版 83

遺構出土の土器 (36)

図版 84

遺構出土の土器 (37)・包含層出土の土器 (2)

図版 85

遺構出土の石器等 (1)

図版 86

遺構出土の石器等 (2)

図版 87

遺構出土の石器等 (3)

図版 88

遺構出土の石器等 (4)

図版 89

遺構出土の石器等 (5)

図版 90

遺構出土の石器等 (6)

図版 91

遺構出土の石器等 (7)

図版 92

遺構出土の石器等 (8)

図版 93

遺構出土の石器等 (9)

図版 94

遺構出土の石器等 (10)

図版 95

遺構出土の石器等 (11)

図版 96

遺構出土の石器等 (12)

図版 97

遺構出土の石器等 (13)

図版 98

遺構出土の石器等 (14)

図版 99

遺構出土の石器等 (15)

図版 100

遺構出土の石器等 (16)

図版 101

遺構出土の石器等 (17)

図版 102

遺構出土の石器等 (18)

図版 103

遺構出土の石器等 (19)

図版 104

遺構出土の石器等 (20)

図版 105

遺構出土の石器等 (21)

図版 106

遺構出土の石器等 (22)

図版 107

遺構出土の接合資料 (1)

図版 108

遺構出土の接合資料 (2)

図版 109

遺構出土の接合資料 (3)

図版 110

遺構出土の接合資料 (4)

図版 111

包含層出土の石器等 (1)

図版 112

包含層出土の石器等 (2)

I 緒 言

1. 調査要項

事業名：高規格幹線道路函館江差自動車道工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：国土交通省北海道開発局函館開発建設部

遺跡名：幸連遺跡（北海道教育委員会登録番号B-05-18）

所在地：上磯郡木古内町字幸連116-2、174-1、2、3、10、12、13

調査面積：3,773 m²

調査期間：平成29（2017）年4月1日～平成30（2018）年3月31日（発掘期間：5月8日～10月18日）

平成30（2018）年4月1日～平成31（2019）年3月29日（発掘期間：9月10日～10月26日）

平成31（2019）年4月1日～令和2（2020）年3月31日（一次整理作業）

令和2（2020）年4月1日～令和3（2021）年3月31日（二次整理作業）

令和3（2021）年4月1日～令和4（2022）年3月31日（二次整理作業）

2. 調査体制

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター

平成29年度

理事長 越田賢一郎

副理事長 中田 仁

専務理事 山田寿雄

常務理事 長沼 孝（第1調査部長兼務）

第2調査部

部長 鈴木 信

第2調査部第1調査課 課長 鎌田 望（発掘担当者）

主査 愛場和人（発掘担当者）

主査 袖岡淳子（発掘担当者）

主査 佐藤 剛（発掘担当者）

主任 熊谷仁志

平成30年度

理事長 越田賢一郎

副理事長 中田 仁

専務理事 山田寿雄

常務理事 長沼 孝

第2調査部

部長 鈴木 信

第2調査部第1調査課 課長 鎌田 望（発掘担当者）

主査 愛場和人（発掘担当者）

主査 袖岡淳子

平成31年度・令和元年度6月まで（整理作業）

理事長 越田賢一郎

副理事長 中田 仁

専務理事 山田寿雄

常務理事 長沼 孝（第1調査部長兼務）

第2調査部

部長 鈴木 信

第2調査部第1調査課 課長 鎌田 望

主査 袖岡淳子

令和元年度7月から10月まで（整理作業）

理事長 長沼 孝	第2調査部第1調査課 課長 鎌田 望
専務理事 山田寿雄	主査 袖岡淳子
常務理事 鈴木 信（第1・第2調査部長兼務）	

令和元年度10月から3月末日まで（整理作業）

理事長 長沼 孝	第2調査部 部長 村田 大
専務理事 山田寿雄	第2調査部第1調査課 課長 鎌田 望
常務理事 鈴木 信（第1調査部長兼務）	主査 袖岡淳子

令和2年度から令和3年度6月まで（整理作業）

理事長 長沼 孝	第1調査部 部長 鈴木 信
専務理事 山田寿雄	第1調査部第3調査課 課長 鈴木宏行
常務理事 鈴木 信（第1調査部長兼務）	主査 愛場和人

令和3年度7月から（整理作業）

理事長 長沼 孝	第1調査部 部長 鈴木 信
専務理事 馬橋 功（総務部長兼務）	第1調査部第3調査課 課長 鈴木宏行
常務理事 鈴木 信（第1調査部長兼務）	主査 愛場和人
	主査 袖岡淳子

3. 調査の経緯・経過

（1）函館江差自動車道の調査の経緯

「函館・江差自動車道」は、函館新道函館インターチェンジ（IC）を起点とし、北斗市、木古内町、上ノ国町を経由し、江差町に至る延長約70kmの一般国道の自動車専用道路である。この路線の建設目的は、近隣主要都市間の交流の促進、函館港、函館空港への物流の効率化、生活の利便性の向上、また、防災時の代替路としての利用等であり、北海道縦貫自動車道、函館新道等と一体となって高速ネットワークを形成している。この内、「函館茂辺地道路」と「茂辺地木古内道路」が事業化されている。

「函館茂辺地道路」は、函館市桔梗町を起点とし北斗市茂辺地を終点とする延長18kmの道路で、平成2（1990）年に事業化され、平成15（2003）年3月には函館IC～北斗中央IC間を皮切りに、平成24（2012）年3月には北斗富川IC～北斗茂辺地IC間が開通し、事業が完了した。

「茂辺地木古内道路」は、北斗市茂辺地を起点とし、木古内町字大平を終点とする延長16kmの道路で、平成6（1994）年に事業化され、現在、北斗茂辺地IC～木古内IC（仮称）間の建設工事が進められている。

事業の工事計画の具体化に伴い、埋蔵文化財保護のための事前協議書が、平成6（1994）年以降数回にわたり北海道開発局函館開発建設部（以下、函館開建）から北海道教育委員会（以下、道教委）に提出された。それらを受け、道教委により工事用地範囲内の埋蔵文化財包蔵地の所在調査、試掘調査及び協議等が行われ、最終的に函館茂辺地道路で12か所（函館市1か所、北斗市11か所）、茂辺地木古内道路で18か所（北斗市3か所、木古内町15か所）の遺跡の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成7(1995)年度から令和元(2019)年度にかけて、30か所の遺跡合計約228,000㎡の面積について行われた。最初の調査は平成7・9(1995・1997)年度の函館市西桔梗1遺跡で、その後しばらく調査はなく、5年後の平成14(2002)年度の北斗市押上1遺跡の調査以降は令和元(2019)年まで毎年行われた。調査主体は財団法人北海道埋蔵文化財センター(平成24年度から公益財団法人へ移行、以下、センター)、北斗市(旧上磯町)教育委員会(以下、北斗市教委)、特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団(平成27年度より一般財団法人道南歴史文化振興財団へ移行)があり、北斗市内の遺跡はこれらの3組織が、函館市、木古内町内の遺跡はセンターが調査を行った。

(2) 幸連遺跡の調査の経緯

幸連遺跡は、昭和54(1979)年の一般分布調査により登載され、出土遺物から縄文時代中期、後期が主体の遺跡とされた。その後、昭和58(1983)年に津軽海峡線建設に伴い工事区域外ではあったが、所在確認調査が行われた。この際の表面採取で遺物は出土しなかった。

平成11(1999)年に、函館開建は茂辺地木古内道路の木古内町大釜谷から大平までの範囲における埋蔵文化財包蔵地に関する事前協議書を道教委に提出した。それを受けて道教委は15地点の所在確認調査が必要と通知した。平成27(2015)年7月7～9日にかけて、道教委は、当センターと函館開建の立会のもと、埋蔵文化財包蔵地の可能性がある幸連遺跡、幸連5遺跡、札蒔5遺跡などの試掘調査を行い、幸連遺跡では縄文時代前期・中期の土器、剥片石器、礫石器などの遺物が確認された。この時、本線部分のボンクレ川側(調査区東側)と補償道路南側の砂利道部分は包含層が残存していないと判断され、この部分は遺構確認調査が適当とされた。また幸連遺跡の補償道路北側部分は平成28(2016)年8月23日に試掘調査を行い、包含層から遺物が確認されたため通常発掘調査と判断された。

道教委から要発掘の回答が出された後、関係者による協議等を経て、最終的に幸連遺跡3,927㎡について公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

(3) 調査の経過

平成29(2017)年度

4月に函館開発建設部から調査区の形状変更の協議があり、調査面積が3,738㎡に変更された。道教委の指示により、本線部分の東側と補償道路部分南側の941㎡は遺構確認調査、それ以外の2,797㎡は通常発掘調査をすることとなった。

5月8日から遺跡内の植木の伐採、抜根、表土除去、測量杭の打設などを行い、5月30日から人力による掘削を開始した。調査区の南側は耕作地として利用されており、排土や雨水の流入がないように対策を行い、砂塵にもネットを張るなどして十分注意して調査を行った。

Qラインより東側の遺構確認区ではジョレンかけを行い、順次遺構を確認していき、通常発掘調査部分では25%調査を先行して行った。6月上旬には、遺構確認区で竪穴住居跡、フラスコ状土坑を多数検出し、通常発掘部分では、盛土遺構を中心に多数の遺物が出土した。遺構数、遺物数とも想定を大きく上回るもので、函館開発建設部と協議し、平成29年度は本線部分2,896㎡のみ調査を行い、補償道路部分の841㎡は次年度に調査することとなった。平成29年度調査で検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑95基、盛土遺構2か所、埋設土器6か所、小柱穴168か所、焼土4か所、遺物は約38万点出土した。調査は10月18日で終了し、埋め戻し後、すぐに調査区東側のボンクレ川橋の橋台部分の工事が行われた。

平成30(2018)年度

8月に調査事業者より補償道路の形状変更の協議があり、調査範囲が841㎡から877㎡に変更された。また調査区の東西境は法面をつけて調査し、法面部分は調査対象外とすることとなった。

調査区は、平成29年度調査の本線部分の東端部を挟んで、南側地区、北側地区に分かれ、いずれも南北

に細長い形状である。現況は北側地区が植林の杉林、南側地区が周辺の畑へ行くための砂利敷き道路であった。本線部分東端部分は橋脚の基礎部分が出来ていた。

9月3日より準備工を開始した。まず重機により、抜根作業を行った後、表土除去を南側地区は全範囲、北側地区は排土の都合上、南側半分について行った。9月4日の台風21号、9月6日の北海道胆振東部地震の影響でやや遅延したが、9月7日から測量・杭打ちを行い、人力による掘削は9月11日から開始した。補償道路北側地区では、排土場所の関係から南側半分の調査した後、北側を表土除去し、調査することとした。補償道路北側および南側地区では、当初予定を超える遺構が検出されたため、函館開発建設部と協議し、調査期間を1週間延長した。検出した遺構は竪穴住居跡5軒、土坑7基、盛土遺構2か所、焼土1か所で、遺物は約37,000点出土した。調査は10月26日に終了した。

報告書作成のための整理作業は平成31・令和元年度から開始し、令和3年度に本報告書（北埋調報369）を刊行した。また報告書刊行後、木古内町教育委員会に遺物の移管等を行った。

4. 調査成果の概要

遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑102基、小土坑164基、焼土18か所、埋設土器6か所、盛土遺構4か所である（表I-1）。時期は、竪穴住居跡3軒が縄文時代中期後半、それ以外は概ね縄文時代前期後半で、本遺跡は縄文時代前期後半の集落跡と考えられる。土坑は、87基がフラスコ状土坑で、調査区東側に密集して分布し、一部列状とみられる部分もある。盛土遺構は、盛土遺構Bでは土器集中41か所、剥片集中29か所など遺物が多く出土し、盛土遺構C・盛土遺構Dは竪穴住居跡を埋めて形成される。

遺物は421,877点出土した（表I-2）。内訳は土器等が67,476点、石器等が354,399点、漆製品2点である。

土器は、円筒土器下層式が66,881点と99%を占め、縄文時代中期、後期の土器が極少量みられる。石器は、剥片が321,397点と90%を占め、次いで礫が29,998点である。剥片石器類では、スクレイパー、両面調整石器、石鏃が多く、礫石器では、たたき石、扁平打製石器が多い。また土坑や盛土遺構の剥片集中では石核、両面調整石器と剥片が接合する例が多くみられた。

漆製品はいずれもフラスコ状土坑から出土した。このうちP-62出土のものは、平面形が半円形の形状を残しており、土壌ごと切り取り、保存処理を行った。

（愛場和人）

表I-1 遺構一覧

種別	記号	遺構数	備考
竪穴住居跡	H	10	
土坑	P	102	番号は104まで、P-28・77欠番
小土坑	S P	164	
焼土	F	18	
埋設土器	—	6	
盛土遺構	M	4	A～D・Aは土層のみ確認

表 I-2 遺物点数一覧

遺物種別	遺構	包含層	合計
Ⅱ群b類土器	61,651	5,230	66,881
Ⅲ群a類土器	5	173	178
Ⅲ群b類土器	60	2	62
Ⅳ群土器	11	66	77
土製品	226	52	278
土器等合計	61,953	5,523	67,476
石鏃	83	23	106
石槍・ナイフ	36	7	43
石錘	17	0	17
つまみ付きナイフ	90	14	104
篋状石器	11	2	13
スクレイパー	410	70	480
両面調整石器	223	73	296
R フレイク	375	58	433
U フレイク	101	0	101
剥片（フレイク）	307,153	14,244	321,397
石核	351	91	442
磨製石斧（石のみ含む）	40	17	57
擦り切り残片	4	3	7
たたき石	157	40	197
すり石	35	5	40
北海道式石冠	12	1	13
扁平打製石器	118	26	144
石鏹	8	0	8
砥石	11	4	15
石錘	11	4	15
台石	5	3	8
石皿	35	0	35
原石	244	92	336
加工痕ある礫	55	7	62
礫	21,549	8,449	29,998
石製品	27	5	32
石器等合計	331,161	23,238	354,399
漆製品	2	0	2
総合計	393,116	28,761	421,877

II 章 遺跡の立地と環境

1. 立地と環境

(1) 立地

幸連遺跡は、木古内町市街地から北東へ約 6 km の木古内町字幸連 116-2・174-1、2、3、10、12、13 に所在する。木古内町は、渡島半島南西部の渡島総合振興局管内にあり、町の南側は津軽海峡に面し、南西側は知内町、西部は上ノ国町、北部は厚沢部町、東部は北斗市と接している。町域は 221.89 km²で、沿岸部を除いた約 9 割が山岳、丘陵地帯である。山の標高は 200 ~ 700 m で、ここから沿岸部へ向け木古内川、佐女川、大平川、蛇内川、幸連川、橋呉川、亀川などの河川が南東もしくは東へ流れ出している。これらは木古内川を除き、流路延長が 10 km 未満の小河川で、上流部や海岸段丘では開析により比較的深い谷地形を作り出している。

遺跡は幸連地区の湾入した海岸線から約 300 m 内陸の海岸段丘上に立地する。標高は 24 ~ 29 m で、北東から南西へ、ごく緩やかな斜面となる。遺跡のすぐ東側は、小河川のボンクレ川が南流し、調査区からボンクレ川河道部までの比高が約 15 m の崖地形となっている。地質的には、遺跡は礫、砂及び泥から成る中位の段丘堆積物層の上にあり、北側には、泥岩を主体とする新第三系の厚沢部層、さらに北側の幸連川上流部には、硬質頁岩層と泥岩層互層で構成される木古内層がある。また遺跡の西側の幸連川近くには、小規模な断層がある。

(2) 幸連とボンクレ川

木古内町幸連は、幸連川東側の上流から下流域の字名で、西側は札苅地区、東側は橋呉地区に隣接する。海岸部は小さく湾入した地形で、その東側には木古内（札苅地区）漁港がある。幸連の東側には泉沢、釜谷など漁港を中心とした同様の小集落が点在する。

寛政 12（1800）年に測量された伊能図には、「コーレン川」の記載があり、その西側に札苅の集落が描かれている。また安政 6（1859）年出版の松浦武四郎の東西蝦夷山川地理取調図には、札苅の東側に「コウレンマ」と記載されている。

幸連遺跡の東側を南流するボンクレ川は、長さ 2.5 km の小河川で、標高 130 m 程の山中から幸連の湾状地形の東側へ流れ出ている。松浦武四郎の渡島日誌では、橋呉川の川筋（幸連川の川筋を誤記している）を記載した後、「ヲヒラサワ小川、コウレン瀾 湾 小川（幸連川か、中略）過て札苅村」とあり、「ヲヒラサワ」と呼称されている。また明治二十九年製版の北海道假製五万分一図「木古内」では、ボンクレ川の位置に「エビシノ沢」と記載されている。その後、大正六年測図の地形図から現在までの 5 万分の 1 図では、地図に河川は描かれるものの河川名は記載されていない。

昭和 45（1970）年刊行の「北海道河川一覧」は電算化に伴い、全道の水系および河川にそれぞれ番号を付し、整理・集積を行ったもので、ここで初めて「ボンクレ川水系」と記載される。

「ヲヒラサワ」・「エビシノ沢」・「ボンクレ川」と、いずれもアイヌ語を起源とする河川名であるが、小河川のため、呼び名が定着せず、変化していったようである。

(3) 遺跡の現況

遺跡の調査区の標高は 23.8 ~ 28.4 m（完掘 V 層面）で、北東側から南西側に緩やかに傾斜し、23 F 周辺には沢頭状の窪んだ地形がある。調査前の現況は、調査区とその北側は杉林で、1 m 未満の間隔で密に植林されていた。調査区の南側は畑地として利用されており、平成 30 年調査の補償道路南側地区は畑地へ

の砂利道であった。植林部分や畑地部分は、上位層が全体に削平されていたものの、大きな地形の改変は行われていなかった。

2. 周辺の遺跡

本古内町内で記載されている遺跡は、令和3（2021）年現在62カ所で、このうち半数以上の34カ所の遺跡について発掘調査が行われている。昭和46（1971）～48（1973）年に札蒨遺跡が北海道開拓記念館によって学術調査された以外は、津軽海峡線建設事業（昭和59（1984）～61（1986）年度）、南渡島地区広域農道整備事業（渡島地区広域営農団地農道整備を含む・平成2（1990）～平成13（2001）年度）、北海道新幹線建設事業（平成21（2009）～平成25（2013）年度）、高規格幹線道函館江差自動車道（平成23（2011）～令和元（2019）年度）など、大規模な事業に伴う緊急発掘調査が、本古内町教育委員会と当センターで行われてきた。

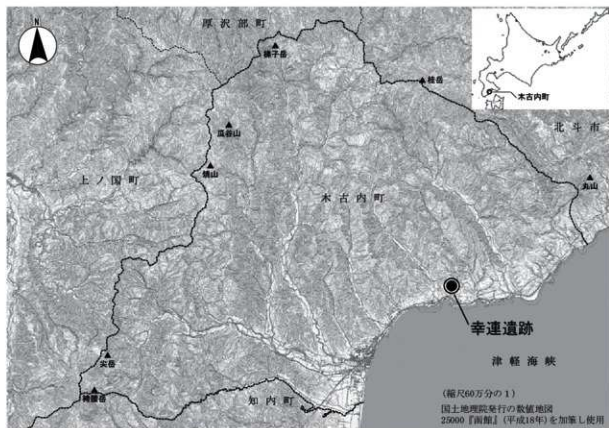
大規模事業で調査された主な遺跡は、津軽海峡線建設では、新道4遺跡、建川1遺跡、建川2遺跡、南渡島地区広域農道では、蛇内遺跡、泉沢2遺跡、亀川3遺跡、釜谷遺跡、釜谷5遺跡、大釜谷3遺跡、北海道新幹線建設関連では、本古内遺跡、本古内2遺跡、大平遺跡、大平4遺跡、蛇内2遺跡、函館江差自動車道では、札蒨5遺跡、札蒨6遺跡、札蒨7遺跡（一部未報告）、札蒨8遺跡、幸連遺跡（本報告）、幸連3遺跡、幸連4遺跡（未報告）、幸連5遺跡（未報告）、釜谷8遺跡、釜谷10遺跡などである。特に南渡島地区広域農道や函館江差自動車道は、海岸段丘の縁辺を通るルートで、縄文時代を中心とした集落遺跡が多数調査されることとなった。

本古内町内で発掘調査が行われた34遺跡について、調査順に一覧にまとめた（表Ⅱ-1）。調査面積は21万㎡を超え、出土遺物は頁岩フレイクや縄文時代各期の土器など、約967万点と多量である。遺跡の年代は旧石器時代、縄文時代早期から晩期、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期、近世まで連続とみられるが、特に縄文時代前期後半と縄文時代後期前葉に遺跡・遺構数が増加し、続縄文時代、アイヌ文化期は少ない傾向がある。

幸連遺跡と同じく、縄文時代前期後半期の集落跡と考えられる遺跡は、新道4遺跡、本古内遺跡、本古内2遺跡、大平遺跡、札蒨5遺跡、札蒨8遺跡、幸連4遺跡、幸連5遺跡、釜谷遺跡、釜谷5遺跡などがあり、このうち堅穴住居跡以外に盛土遺構（土器捨て場）とフラスコ状土坑を確認した遺跡は、大平遺跡、釜谷遺跡、幸連5遺跡がある。

幸連遺跡に隣接する幸連4遺跡、幸連5遺跡については、位置図（図Ⅱ-5）を作成した。幸連4遺跡はボンクレ川を挟んで東側、幸連5遺跡は無名の沢を挟んで西側に位置する。幸連4遺跡は、主に縄文時代前期後半と、縄文時代中期後半から後期前葉にかけての集落跡で、遺物は64万点出土した。縄文時代前期後半では、堅穴住居跡とともに盛土遺構、廃棄場が確認されている。幸連5遺跡は、縄文時代前期後半から後期前葉にかけての大きな集落跡で、堅穴住居跡約150軒、フラスコ状土坑を含む土坑約600基、盛土遺構3カ所など多数の遺構が確認され、遺物も約175万点と多量に出土した。調査区の台地部分では、中央に遺構がみられない削平された区域があり、その両側にフラスコ状土坑群（縄文時代前期後半～中期前葉）、堅穴住居跡集大成（縄文時代前期後半～後期前葉）がみられ、さらに削平域の両側に縄文時代中期末葉～後期前葉の盛土遺構が2条形成される。盛土遺構はこれ以外に、縄文時代前期後半から中期前葉のものが斜面にみられる。

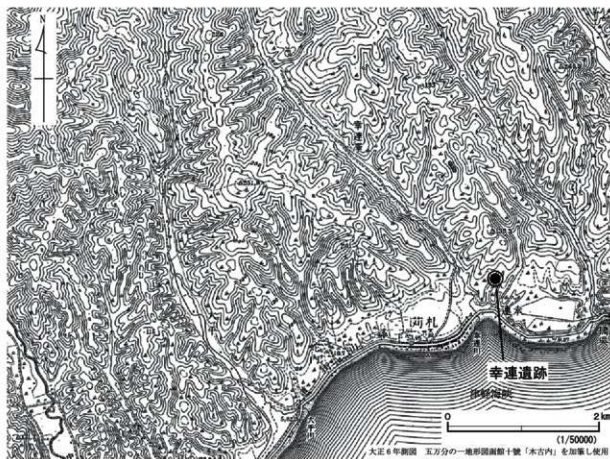
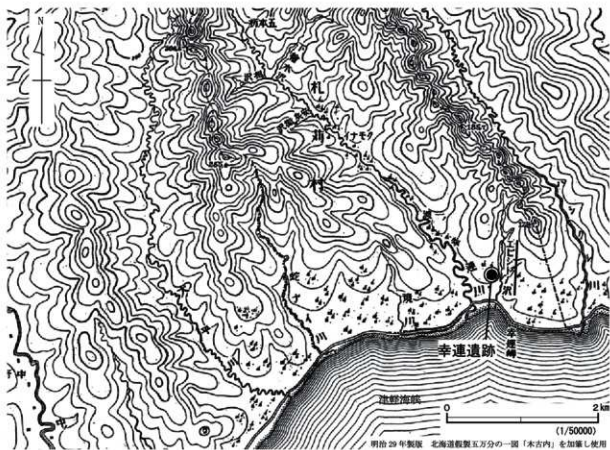
幸連遺跡・幸連4遺跡・幸連5遺跡は、縄文時代前期後半から利用が開始され、幸連遺跡・幸連4遺跡では円筒土器下層d2式期を境に縄文時代中期後半まで利用が希薄になるのに対し、幸連5遺跡は縄文時代中期から後期前葉にかけて最盛期を迎えるようである。（愛媛）



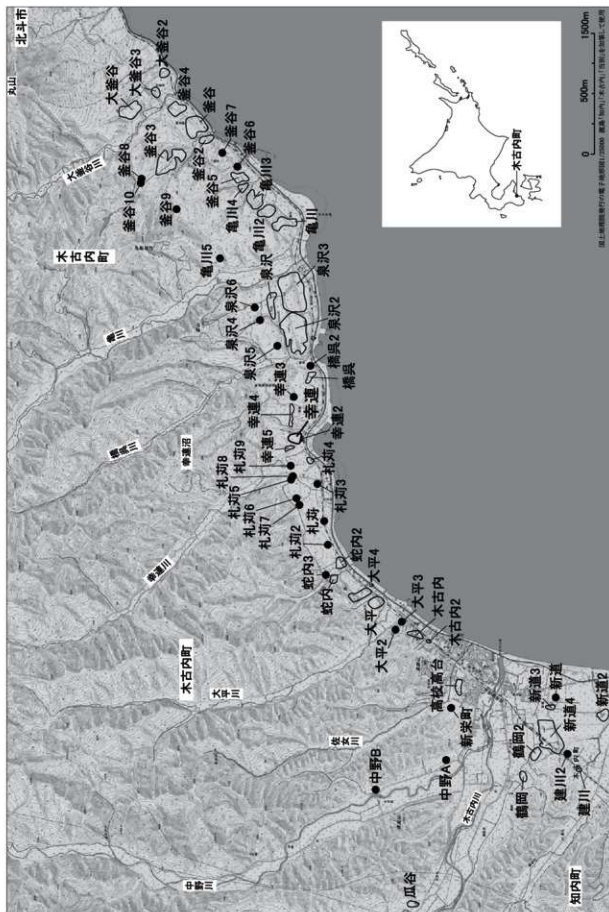
図Ⅱ-1 遺跡の位置と木古内町の地形



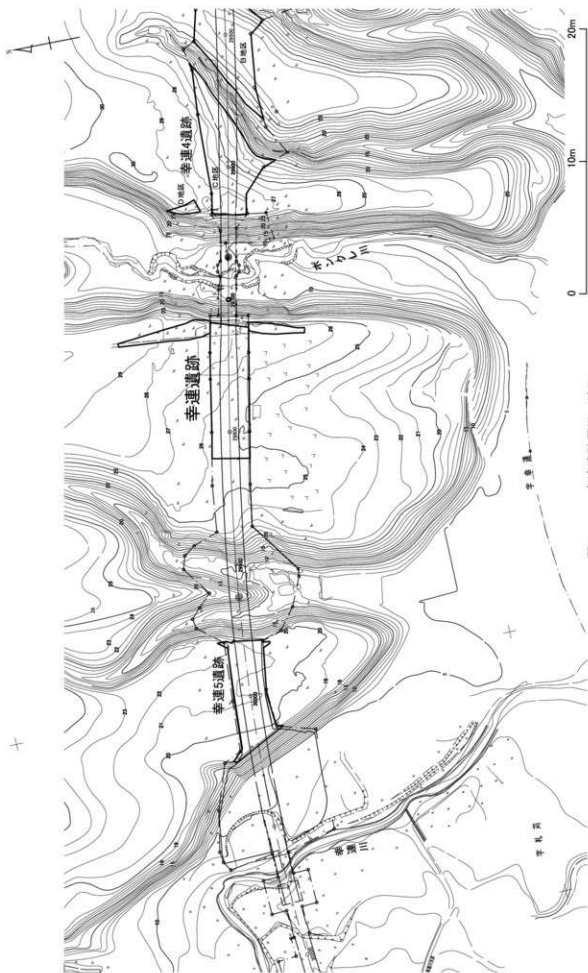
図 II-2 周辺の地形



図Ⅱ-3 周辺の地形（明治期・大正期）



図Ⅱ-4 木古内町の遺跡



図II-5 幸運道跡周辺の地形

表Ⅱ-1 木古内町発掘調査遺跡一覧(1)

遺跡名 (発掘番号)	調査年度	調査理由	調査者	発掘面積 (㎡)	発掘遺構 (㎡)	遺跡の主な時期 (発掘報告書の調査結果から引用)	主な遺構・特記事項 (発掘報告書の調査結果から引用)	出土遺物 点数	埋蔵 深さ	文献等 発行年
丸島遺跡 (3-05-04)	昭和46(1971)	学術調査(1次)	北海道	15						
	昭和47(1972)	学術調査(2次)	朝野記念館	196	353	縄文時代晩期	住居址2(中層1・後期1)、土庫遺構40、 礎石遺構	合計不明	7~8	1976 札道
	昭和48(1973)	学術調査(3次)	朝野記念館	223						
	昭和48(1973)	国道延伸工事 遺構調査(追加)	町教委	812	縄文時代晩期・アイヌ文化期	住居址2、集石2、土庫遺 構	合計不明	5~7	1974 丸島遺跡	
鎌川1遺跡 (3-05-10)	昭和60(1985)	津軽海峡線 建設調査(追加)	道庁文	1,753	1,627	縄文時代後期前期・中期	ビット4、礎石45	21,000	7~10	1988 津軽海峡線34
	昭和59(1984)	津軽海峡線 建設調査	道庁文	277		縄文時代後期前期主体	住居址1、ビット4	1,218	15~17	1988 津軽海峡線33
鎌川2遺跡 (3-05-11)	昭和60(1985)	津軽海峡線 建設調査	道庁文	753	1,627	縄文時代後期前期主体	ビット1、小ビット18	3,871	18~29	1987 津軽海峡線43
	昭和61(1986)			1,474	5,632					1986 津軽海峡線32A・B地区
駒込4遺跡 (3-05-17)	昭和60(1985)	津軽海峡線 建設調査	道庁文	4,034	山石器時代 縄文時代前期後半~晩期	壁穴住居址64 (前期5・中期37・後期10など) 土坑31・フラスコ状ビット73 柱穴跡小ビット多数・礎石遺構1(後期) など	960,046	12~23	1987 津軽海峡線43 B・C・D地区	
	昭和61(1986)			5,487						1988 津軽海峡線52 D・E・G地区
	平成25(2013)	北海道新幹線	道庁文	745	縄文時代前期後半・後期		44,322	15~29	2015 津軽海峡線320 駒込4遺跡(4)	
	昭和63(1988)			1,902	縄文時代中期・前期後半・後期	住居址4(前期1・中期2・後期1) ビット6、礎石	21,150	17~18	1995 駒込2遺跡1 出土品	
駒込2遺跡 (3-05-18)	平成元(1990)	農地造成	町教委	3,000	縄文時代中期・後期	住居址2(中層2・後期1)、壁穴住居址1 小ビット1、礎石1、ビット7、Tビット1など	7,972	15~18	1990 駒込2遺跡2	
	平成2(1990)	道内地区 調査事業	町教委	1,950	山石器時代・縄文時代前期前半	溝状遺構1、溝土1、石壁埋合資料	54,208	25~26	1991 登母4遺跡	
登母4遺跡 (3-05-19)	平成3(1991)			1,790						
	平成4(1992)	南道内地区 広域調査事業	町教委	2,890	5,100	縄文時代前期後半・早期	住居址2(長期安定期、前期76)、 ビット34基(内フラスコ35基)、土庫遺構	1,530,000	18~22	1999 登母5遺跡 調査報告書
登母5遺跡 (3-05-44)	平成5(1993)	南道内地区 広域調査事業	町教委	629	829	縄文時代前期後半	住居址27(前期25)、小壁穴1、ビット4 石壁跡2など	58,000	20~26	1995 登母5遺跡
	平成7(1995)	南道内地区 広域調査事業	町教委	1,296	縄文時代後期・晩期	壁穴住居址2、ビット2、礎石6	8,343	27~30	1996 尾川2遺跡	
尾川2遺跡 (3-05-38)	平成7(1995)	南道内地区 広域調査事業	町教委	1,794	縄文時代後期・前期	住居址3(前期1・後期2) 壁穴住居址4、ビット11、礎石57	150,000	20~26	1996 尾川2遺跡	
	平成8(1996)	南道内地区 広域調査事業	町教委	2,319	縄文時代後期	溝1 田河遺跡	2,344	21~26	1996 尾川2遺跡	
尾川3遺跡 (3-05-42)	平成8(1996)	砂利採取	町教委	1,630	縄文時代中期・後期	住居址1(中期)、ビット22、礎石2	964	16~21	1997 尾川3遺跡	
	平成9(1996)			5,912	5,632	縄文時代後期主体・中期・晩期	住居址11(後期)、土庫9(フラスコあり) 埋設土器1、石壁跡6など	182,001	20~23	2003 尾川2遺跡A地区
尾川2遺跡 (3-05-41) A地区	平成10(1996)			630						
	平成11(1999)			400						
	平成12(2000)	南道内地区 広域調査事業	町教委	2,713	3,113	縄文時代後期中期~後期	土庫1、Tビット1、礎石12	4,460	25~27	2003 尾川2遺跡(非地蔵)
	平成13(2001)			2,700	2,900	縄文時代前期後半主体・後期	壁穴住居址1、ビット1、石壁跡1、 礎石も、石壁跡も	130,145	7~18	2004 尾川2遺跡C地区
尾川2遺跡 (3-05-11) C地区	平成12(2000)			1,237	2,900	縄文時代	Tビット25(遺失)	0	6~9	1999 尾川2遺跡
	平成10(1998)	砂利採取	町教委	遺構確認	17,227	縄文時代	Tビット25(遺失)	0	6~9	1999 尾川2遺跡
	平成10(1998)			---						
	平成11(1999)			---						
尾川2遺跡 北地区	平成12(2000)	砂利採取	町教委	---	8,810	縄文時代早期後半	柱穴跡1、フラスコ状ビット4、ビットも、 礎石ビット38、ビット8、埋設土器8	1,053	7~10	1997 尾川2遺跡北地区
	平成13(2001)			---						
	平成13(2001)			---						
	平成14(2002)			---						
大倉谷3遺跡 (3-05-47)	平成13(2001)	南道内地区 広域調査事業	町教委	4,756	縄文時代前期~晩期	A地区 ビット5、石壁跡1など 合戦跡、住居址1、壁穴住居址1、 ビット30(フラスコあり、後期土庫3基) など、壁柱遺構や支、銅器等	35,200	14~38	2003 大倉谷3遺跡	
	平成12(2000)	南道内地区 広域調査事業	町教委	1,200	縄文時代前期後半・中期 後期	壁穴住居址1(前期3・中期1)基 壁穴住居址1基、 ビット30基(内フラスコ3)、 柱穴跡ビット44基、溝・溝遺構など	190,909	17~21	2004 松内遺跡	
松内遺跡 (3-05-06)	平成21(2009)			411	縄文時代前期後半	壁穴住居址1、土坑、 フラスコ状ビット1	22,794	15~29	2011 津軽海峡線330 大平遺跡・大平4遺跡	
	平成22(2010)	北海道新幹線	道庁文	2,140	4,236	縄文時代前期後半 縄文文化期	壁穴住居址45(前期27・後期18)基 土坑30、フラスコ状ビット6 柱穴跡ビット36、Tビット6、礎石遺構1 礎石1基、銅器集中1基、銅器集中 土庫遺構、石壁埋合資料	1,760,000	8~10	2016 津軽海峡線321 大平遺跡(2) 遺構確認 2017 津軽海峡線328 大平遺跡(3) 礎石遺構、銅器埋合
	平成23(2011)			2,230						
	平成25(2013)	国鉄江差 自動車道	道庁文	1,700	縄文時代晩期前期・後期	溝3、土坑5、小ビット1、 鉄釘遺構(前期)1か所	129,762	3~12	2017 津軽海峡線329 大平遺跡(4)	
大平4遺跡 (3-05-19)	平成21(2009)	北海道新幹線	道庁文	1,172	縄文時代前期後半・早期	土坑20(前期22・後期2・晩期2) 土坑集中14、石壁埋合資料	40,465	9~11	2011 津軽海峡線330 大平遺跡・大平4遺跡	
	平成22(2010)			460	縄文時代前期後半・ 前期後半・中期・晩期	壁穴住居址2、土坑2、銅器集中2	13,562	7~13	2012 津軽海峡線332 大平遺跡(2) 松内遺跡(2)	
	平成24(2012)	国鉄江差 自動車道	道庁文	7,094	15,583	縄文時代中期後半	壁穴住居址12、土坑27、Tビット4、 溝13、銅器集中15	94,704	12~24	2017 津軽海峡線331 大平4遺跡(2)
	平成25(2013)			1,420						
松内2遺跡 (3-05-18)	平成26(2014)			7,119						
	平成21(2009)			10,430	縄文時代前期後半・前期後半 ・早期	住居址15 (早期7・前期1・中期1・後期10) 土坑30(内フラスコ2)、土坑14、 銅器集中3、一部土器など	126,172	8~12	2011 津軽海峡線331	
	平成22(2010)	北海道新幹線	道庁文	950	11,380					
	平成23(2011)			77	縄文時代前期後半・後期前期		175	11~12	2012 津軽海峡線332 大平遺跡(2) 松内遺跡(2)	

表Ⅱ－１ 木古内町発掘調査遺跡一覧（２）

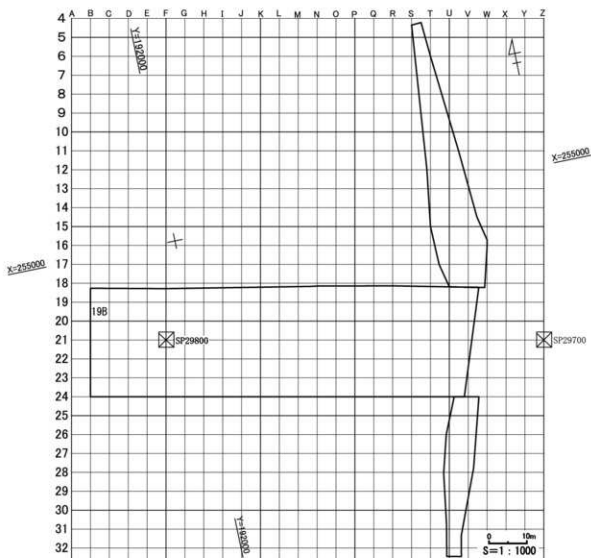
遺跡名 (発掘番号)	調査年度	調査箇所	調査者	年度ごと 調査面積 (㎡)	合計 調査面積 (㎡)	遺跡の主な時期	主な遺構・特記事項 (名称等・発掘調査の状況から引用)	出土遺物 点数	埋蔵 高さ	文献等 発行年
木古内2遺跡 (9-49-28)	平成22(2010)	北海道新幹線	遺構文		360	縄文時代前期後半	蟹六住居跡8、削土集中1	9,290	7～9	2011北道調査278
	平成22(2011)				330	縄文時代前期後半	なし・底面跡	10,033	5～9	2012北道調査293
木古内3遺跡 (9-49-52)	平成22(2010)	北海道新幹線	遺構文	7,716	12,020	縄文時代前期・前期後半・後期 縄文文化層	蟹六住居跡31 (早期8・前期12・後期6・削土21・土坑15) 土坑2・埋設土器2、遺物集中、 フレイク・チップ集中	138,574	6～12	2014北道調査304
	平成22(2011)			4,304			蟹六住居跡13(中期6・後期7)・土坑7 土坑10、埋設土器2、遺物集中、 フレイク・チップ集中			
札幌5遺跡 (9-49-48)	平成22(2011)	国道江差 自動車道	遺構文		2,758	縄文時代中期前半・後期前半	蟹六住居跡9、1ピット6、 柱穴跡の小土坑127など	200,000	17～24	2014北道調査301
	平成24(2012)				796 8,414	縄文時代早期中葉・後期前半	住居跡2(後期)、土坑21、1ピット2、 柱穴跡の小土坑1、遺物集中、 フレイク・チップ集中	41,116	81～85	2014北道調査305
札幌5遺跡 (9-49-48)	平成29(2017)	国道江差 自動車道	遺構文	3,340	4,163	旧石器時代 縄文時代前期後半	蟹六住居跡9、1ピット6、 柱穴跡の小土坑127など	30,451	15～20	2012北道調査294
	平成29(2017)			770			蟹六住居跡1(後期7)、土坑6、 削土1、フレイク・チップ集中	5,336	15～20	2019北道調査283 札幌5遺跡(2)
札幌7遺跡 (9-49-54)	平成25(2013)	国道江差 自動車道	遺構文	10,690	15,687	縄文時代中期前半・後期前半	蟹六住居跡28、土坑1043、小土坑13、 削土13、削土集中6、遺物集中1 埋設土器1、遺土遺構2(後期)など	34,000	15～27	本報告 2014調査年報26
	平成26(2014)			1,295				50,000		本報告 2015調査年報27
	平成27(2015)			1,000				100,000		本報告 2016調査年報28
	平成28(2016)			1,626				450,000		本報告 2017調査年報29
	平成29(2017)			990				3,000		本報告 2018調査年報30
札幌5遺跡 (9-49-54)	平成26(2014)	国道江差 自動車道	遺構文		6,474	縄文時代前期前半・後期前半	土坑2、1ピット2、遺土1、 フレイク・チップ集中	1,048	78～82	2017北道調査232
札幌5遺跡 (9-49-56)	平成26(2014)	国道江差 自動車道	遺構文		8,364	縄文時代中期前半・後期前半	蟹六住居跡3(中期2・後期1)、土坑19 1ピット10、削土19、土層埋設遺構1 遺物集中6、フレイク・チップ集中1など	15,206	26～36	2017北道調査230
札幌6遺跡 (9-49-56)	平成26(2014)	国道江差 自動車道	遺構文		832	縄文時代前期後半・後期前半	蟹六住居跡5、土坑9、1ピット1、 削土1、遺土遺構(前期)	183,241	11～14	2019北道調査262
中道3遺跡 (9-49-53)	平成27(2015)	国道江差 自動車道	遺構文		9,709	縄文時代中期前半・後期前半	蟹六住居跡15、土坑16、1ピット1、 削土18、土層集中3、削土集中6、 削土1、削土集中	27,121	20～28	2018北道調査243
中道4遺跡 (9-49-40)	平成27(2015)	国道江差 自動車道	遺構文	7,670	10,255	縄文時代前期後半・ 中期～後期前半	蟹六住居跡43、土坑103、土坑27、 埋設土器1、土層集中1、 削土集中20、遺物集中2、遺土遺構	640,000	30～28	本報告 2016調査年報28 本報告 2017調査年報29
	平成28(2016)			2,277						
札幌6遺跡 (9-49-41)	平成27(2015)	国道江差 自動車道	遺構文	1,668	3,108	縄文時代早期後半・後期前半	土坑1、削土14	8,078	44～48	2018北道調査350
	平成28(2016)			1,441						
中道10遺跡 (9-49-54)	平成28(2016)	国道江差 自動車道	遺構文		1,430	縄文時代後期前半・早期	蟹六住居跡2、土坑16(内アラスコ)、 削土27、石層埋設資料	90,250	77～84	2018北道調査344 本報告 2017調査年報29 本報告 2018調査年報30 本報告 2019調査年報31 本報告 2020調査年報32
	平成28(2016)				61	縄文時代前期後半～後期前半	蟹六住居跡140以上、 土坑595(アラスコ状土坑あり)、 削土、小遺物多数 遺土遺構2(前期～後期)			
	平成29(2017)				1,430					
	平成30(2018)				1,065					
	平成31(2019)				1,622					
中道遺跡 (9-49-19)	平成29(2017)	国道江差 自動車道	遺構文		2,896	縄文時代前期後半土坑・中期	蟹六住居跡10(中期3・前期7)、 土坑102(内アラスコ状土坑86) 小土坑168、削土19、埋設土器6、 遺土遺構6	421,877	24～29	本報告
	平成30(2018)				877					
					210,940					
								9,678,604		

町教委：木古内町教育委員会 遺構文：財団法人北海道埋蔵文化センター（平成24年度から分館財団法人）
出土点数は、本報告分については正確ではない

Ⅲ章 調査の概要

1. 発掘区の設定

発掘区の設定は、すでに調査が行われていた隣接する幸連4遺跡、幸連5遺跡と同様に、建設道路本線中央のラインを基軸として5mグリッドを設定した。設定に使用した基図は、函館開発建設部作成の「平成20年度 函館江差自動車道木古内町 茂辺地木古内道路亀川幸連間用地測量の用地平面図（縮尺1：1000）」である。方眼のラインは、調査区予定範囲のほぼ中央を通る本線のSP29700～SP29900を結ぶ横線を21ラインとして数字の基軸（南北方向 北から昇順）、SP29700から21ラインに直交する縦線をZ、SP29800の縦線をFとしてアルファベットの基軸（東西方向 西から昇順）として、5m毎に設定した。当遺跡の南北方向の数字は4～32、東西方向のアルファベットはB～Vで、各グリッドは19Bのように数字とアルファベットの組合せで呼称した。世界測地系の平面直角座標（第XⅠ系）は、基準杭21 F（SP29800）がX＝－255,025.309 Y＝19,192.389、21UがX＝－255,045.471 Y＝19,265.840である。（図Ⅲ-1）



図Ⅲ-1 発掘区設定図

2. 基本土層

土層の観察は『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジスト学会 1997）・『新版標準土色帖』（小山・竹原 2004）を参考に必要な項目を設けた。

調査区内は植林や畑の耕作により、20 cm程の削平を受けている。調査区西側でⅡ・Ⅲ層を確認したが、調査区東側は、Ⅳ・Ⅴ層まで削平されている。これは縄文時代の削平の可能性もある。

「Ⅰ層：表土・耕作土」

調査区北側の植林部分では黒色土で、笹根を多く含む。調査区南側は耕作土で黒褐色を呈する。調査時には重機で掘削した。層厚 10 ～ 20 cm。

「Ⅱ層：黒褐色土」

本層は調査区西側や住居跡の堆積内でみられる。また遺構や窪んだ地形部分では、駒ヶ岳 d 火山灰層、白頭山一苦小牧降下火山灰層が、この層の中から検出された。また近世の畑跡の土層断面でも検出した（MB土層・図Ⅳ-106 参照）。

黒色 10YR2/1 ～ 黒褐色 10YR2/2 埴壤土 ぼそぼそ 平均層厚 10 cm

「Ⅲ層：黒褐色土（一部暗褐色土）」

調査区西側でみられる縄文時代の遺物包含層である。盛土遺構 A・盛土遺構 B の範囲では盛土層を境にⅢ層を上層（Ⅲ a）と下層（Ⅲ b）に分けた。

黒褐色 10YR2/3 埴土～埴壤土 粘性中 堅密度堅 平均層厚Ⅲ a は 8 cm、Ⅲ b は 10 ～ 15 cm

「Ⅳ層：暗褐色土～褐色土：漸移層」

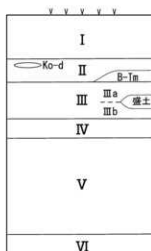
暗褐色 10YR3/4 ～ にぶい黄褐色 10YR4/3 埴壤土 粘性中 堅密度堅 層厚 10 ～ 15 cm

「Ⅴ層：黄褐色ローム」

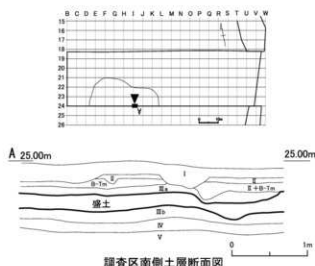
明黄褐色 10YR6/6 ～ 黄褐色 10YR5/6 埴壤土 粘性強 堅密度堅～すこぶる堅 層厚 1.2 ～ 1.5 m

「Ⅵ層：にぶい黄褐色土」深いプラスチック状土坑の断面で確認した。

にぶい黄褐色 10YR5/4 ～ 黄褐色 10YR8/6 砂埴土～砂土（一部シルト混じる） 堅密度すこぶる堅 粘性弱 2 ～ 50 mm の礫（亜円・半風化）40% 含む。（愛場・袖岡淳子）



基本土層模式図



調査区南側土層断面図

図Ⅲ-2 調査区の土層

3. 調査の方法

調査前には、重機により抜根と表土の掘削を行い、その後方眼杭を打設した。調査開始時には、スコップ・鋤などを使い、人力で調査区境の整形と全体清掃を行った後、地形測量を行った。Qラインより東側の遺構確認調査範囲では遺構確認後、順次遺構調査を行い、Qラインより西側の通常発掘調査範囲では、25%調査を行った。遺構確認範囲では竪穴住居跡やフラスコ状土坑、通常発掘範囲では盛土遺構や小土坑群が多数検出し、それぞれ調査を行った。

遺構調査のうち、フラスコ状土坑の調査は、オーバーハング部分の崩落が起きないように作業を進めた。オーバーハング部分は記録後、すぐに上部を掘り崩す、もしくは上部は広めのトレンチで掘り下げ、土坑中位から調査するなどの方法を用いた。このため完掘写真は底面のみになるものが多く、土層断面に直交するエレベーション図がないものが多い。また深さが2mを超えるフラスコ状土坑は、2m近く掘り下げても坑底面が確認できない場合、周囲を広く、全体に0.5から1m程掘り下げて階段状にした後に改めて坑底部の調査を行い、掘削の断面が2m以上にならないよう留意して調査した。

盛土遺構は上面の地形測量を行い、トレンチで土層と範囲を確認した後、土層観察用ベルトを残し、グリッドごとに数cmずつ移植などで掘り下げた。焼土や遺物の集中は、確認した順番に番号を付け、焼土は平面図と断面図、土器や剥片などの遺物集中は、出土状況図や平面の範囲図を作成した。土器集中や剥片集中以外の遺物は、グリッド、層位ごとに取り上げた。

その他の遺構の調査は、確認した順番に番号を付け、適宜行った。竪穴住居跡では土層観察のベルトを設定し、土坑では全体の半分を掘り下げるなどして、土層を観察し、記録した。床面や坑底面の検出後は柱穴・杭穴や焼土などの付属遺構を調査、記録した。竪穴住居跡や土坑の遺物は、床面・坑底面出土の遺物については位置を記録し、それ以外は層位ごとに取り上げた。

竪穴住居跡や盛土遺構の剥片集中では、手取り後、周辺の土壌を取り上げ、水洗選別を行った。

包含層の調査は5×5mのグリッド単位で行い、移植ごと、ねじり鎌などで、V層上面まで掘り下げた。

現地調査で使用したカメラは、6×7判のフィルムカメラ（マミヤ RZ67PRO II・フィルムはFUJICHROME PROVIA100Fを使用）・デジタル一眼レフカメラ（D5500）・コンパクトデジタルカメラである。撮影は調査区全景、調査状況、遺構等の土層・完掘状況、遺物出土状況について行った。

4. 整理の方法

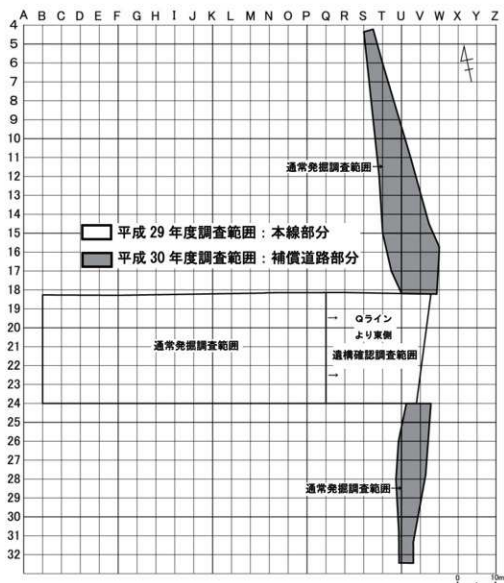
（1）一次整理の方法

出土した遺物は、遺物の種類（土器・石器・礫）ごとにまとめ、「遺跡名」「遺構・発掘区」「層位」「日付」を記入したビニール袋に入れて取り上げた。遺物は水洗・乾燥後に分類し、遺物名、出土地点、出土層位、日付などの情報を「遺物カード」に記入し、ビニール袋に収納した。遺物カードの情報は、手書きで一覧表にまとめた後、パソコンで表計算ソフトを使ってデータ化し、これを遺物登録台帳とした。フレイク集中や焼土から採取した土壌は、篩などに入れて水洗し、細かな遺物や炭化物を回収した。

土器は江別のセンターで、カードの情報「コ（遺跡名）・出土地点・出土層位・取り上げ番号」を裏面に注記した。

（2）二次整理の方法

土器の接合は、遺構内、遺構が位置する発掘区、遺構間と周囲へ広げるように進めた。復元可能な土器は復元し、実測図・トレース図を作成した。破片土器は特徴的な口縁部・底部を中心に選り出し、拓影図と



図Ⅲ-3 調査の方法

断面図（実測後、デジタルトレース）を組み合わせて図示した。

石器は、堅穴住居跡、土坑、盛土遺構の剥片集中について、石核、両面調整石器と剥片の接合作業を行った。多数の接合資料が得られ、そのうち接合状況のよいものについて、展開写真を撮影し、それをもとに実測図・トレース図を作成した。掲載石器は完形のものを中心に、遺跡の特徴や遺物の出土数を考慮して選出し、実測図・トレース図を作成した。

5. 遺物の分類基準

・土器等の分類

土器は（公財）北海道埋蔵文化財センターの一般的な分類に準じ、縄文時代早期から擦文文化期に至るまでⅠ～Ⅶ群に分類し、遺物の出土がみられる時期については、細分類を行った。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

a 類：貝殻・沈線文系土器および条痕文系土器群

b 類：縄文・燃糸文・絡条体瓦痕文・貼付文・縄線文のあるもの

b-1 類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの

b-2 類：コッタロ式に相当するもの

b-3 類：中茶路式に相当するもの

b-4 類：東釧路Ⅳ式に相当するもの

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

a 類：縄文が施された丸底・尖底の土器群

b 類：円筒土器下層式土器群

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

a 類：円筒上層式a式・b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

b 類：板林式、大安在B式、ノダップⅡ式などに相当するもの

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

a 類：天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの

b 類：ウサクマイC式、手稲式、ホッケマ式に相当するもの

c 類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群

Ⅶ群 擦文文化期に属する土器群

土製品は、土器片円盤、擦り切り痕のある土器片、焼成粘土塊がある。

・石器等の分類

剥片石器では、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパー、筈状石器、両面調整石器、二次加工ある剥片（Rフレイク）、使用痕ある剥片（Uフレイク）、石核、剥片（フレイク）がある。

礫石器では、磨製石斧、たたき石、すり石、扁平打製石器、北海道式石冠、石鋸、砥石、台石、石皿、石錘、加工痕ある礫、その他として、礫、原石がある。

石製品は石棒、玉、異形石器、軽石製のもの、線刻された礫などがある。

（愛場）

IV章 遺構

1. 概要

確認した遺構は、堅穴住居跡 10 軒、土坑 102 基、小土坑 164 基、焼土 18 か所、埋設土器 6 か所、盛土遺構 4 か所である。時期は堅穴住居跡 3 軒（H-1・2・4）が縄文時代中期後半で、それ以外は概ね縄文時代前期後半と考えられる。

縄文時代前期後半の堅穴住居跡 7 軒は、H-5 が盛土遺構 MB 近くにあるほか、調査区東側のボンクレ川近くに分布する。平面形は円形、不整形、隅丸長方形があり、隅丸長方形のものは長径 8 m 以上と大型で、ベンチ構造を持つ。縄文時代中期後半の堅穴住居跡 3 軒は、調査区のやや東側にあり、いずれも長軸が南北方向で、平面形が長方形の石組炉を有する。

土坑は P-104 まで番号を付けたが、2 か所（P-28・77）は調査の結果、自然の落ち込みであったため欠番とした。このうち 87 基がフラスコ状土坑で、調査区中央から東側に濃密に分布し、等高線に沿って列状となる部分もある。フラスコ状土坑からは II 群 b 類土器、石器、剥片など遺物が多く出土し、石製品や漆製品などもみられた。

小土坑は主に柱穴・杭穴と考えられるもので、調査区西側に分布するものと、東側のフラスコ状土坑分布域に分布するものがある。

埋設土器は埋設土器 1～5 はフラスコ状土坑の分布域にあり、埋設土器 6 は MB の北側に位置する。完形の土器は埋設土器 6 のみで、埋設土器 1・2 は胴部から底部の復元で、口縁部が少量みられ、埋設土器 3・4・5 は胴部から底部の復元である。

盛土遺構（M）は 4 か所で確認されたが、MA は包含層調査後、土層断面での確認で、平面形は不明で遺物も特定できない。MB は 22・23 E・F 区付近のやや窪んだ沢頭状の地形周辺を V 層主体の土で埋めて形成されるもので、土器集中 40 か所、剥片集中 29 か所を中心に 27 万点を超える遺物が出土した。MC・MD はボンクレ川側に位置し、V 層主体土で堅穴住居跡を埋めて、その周辺に形成される。MB に比し、遺物は少ない。

2. 堅穴住居跡

H-1

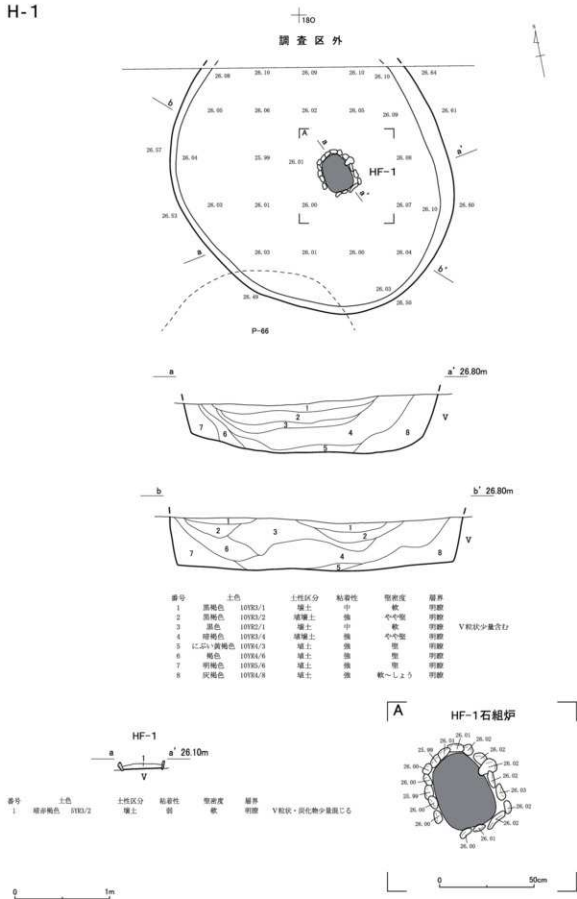
位置 18N・18O 規模 (2.81) × 2.81 / (2.73) × 2.60 / 0.68 m 平面形 楕円形

確認・調査 無名沢とボンクレ川の間にあり、沢地形に面した南西向きの平坦面に位置する。本線の表土除去により V 層面で黒～暗褐色土のまとまりとして確認した。周辺は耕作により II～IV 層が削平されていた。土層観察のベルトを設定し、トレンチ調査と並行して黒～暗褐色土を掘り下げたところ、平坦な床面とほぼ直角に立ち上がる壁を検出し、住居跡と認定した。

覆土 8 層に分層した。覆土 1～4 層は堅穴住居跡のくぼみに溜まった自然堆積層、5～8 層は V 層ローム質土の割合が多い土層となっており、屋根材とした土あるいは掘り上げ土の流入と考えられる。

付属遺構 床面の中央よりやや東寄りに、長方形気味の石組炉（HF-1）を検出した。掌に収まるほどの扁平な礎を立て、一辺を重ねながら炉を構築している。石組炉の中には炭化物やローム粒の混じる暗赤褐色土が堆積していた。柱穴は住居内と周辺を精査したが検出しなかった。

H-1



図IV-2 H-1

遺物出土状況 遺物は覆土中からⅢ群b類土器4点、剥片1点、礫31点、HF-1の石組の礫17点の計53点出土した。

時期 床面からは時期を判断できる遺物の出土は無いが、同じ形態の石組炉を有するH-2と同様、縄文時代中期後半と考えられる。

H-2

位置 18Q・18R・19Q・19R **規模** 5.03×4.44/4.75×3.87/0.80 m

平面形 不整の楕円形

確認・調査 無名沢とポンクレ川の間にある沢地形に面した南西向きの平坦面に位置する。表土除去後にV層面でⅡ層とB-Tm火山灰の広がりを確認した。土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査と並行しながら平面を掘り下げていったところ、覆土下位から床面にかけて炭化材と焼土、平坦な床面と方形の石組炉、急で明瞭な壁の立ち上がりを検出し、焼失した住居跡と認定した。覆土下位～床面にかけて検出した炭化材と炉跡から得られた炭化物については炭化樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。

覆土 27層に分層した。上面はⅡ層とB-Tm層、上位はⅡ・Ⅲ層由来の土や周辺土の流入による自然堆積で、下位はV層ローム質土の割合が多い覆土、壁際は、屋根材の土あるいは掘り上げ土の流入と考えられる。

付属遺構 石組炉1か所(HF-1)、焼土2か所(HF-2・3)、柱穴(HSP)3か所を確認した。

住居平面の長軸はほぼ南北方向にあり、長軸上の床面中心部より南側に長方形の石組炉HF-1がある。炉石は手に収まるほどの礫が並べられている。その他、床面の北西端には焼失に関係するとみられるHF-2・3がある。HSP-1・2は住居北側に位置し、深さに違いはあるものの、直径が約20 cm、底が平坦、覆土がローム質土を主体とし、堅密度がすこぶるしょう、と共通している。HSP-3は底が狭く、尖鋭である。住居跡の構造材と考えられる炭化材について樹種同定を行ったところ、試料11件(Kor-1～11)のうち9件がクリで、ほかにはハリギリ(Kor-2)、ブナ属(Kor-3)であった(付篇参照)。

遺物出土状況 覆土中よりⅡ群b類土器143点、Ⅲ群b類土器10点、焼成粘土塊2点、石器等173点、床面からⅡ群b類土器3点、Ⅲ群b類土器3点、スクレイパー1点、Uフレイク1点、Rフレイク1点、剥片2点、すり石1点、礫12点、HF-1の石組の礫25点など計377点出土した。床面のⅡ群b類土器は住居の時期を反映しているものではなく、重複している土坑由来のものである。

時期 縄文時代前期後半のフラスコ状土坑を4基切って構築しているため、それより新しい。床面からⅢ群b類土器片が出土している。覆土下位～床面から検出した炭化材とHF-1から得られた炭化物で放射性炭素年代測定を行い、HF-1(Kor-1)は4,110±30yrBP、覆土下位の炭化材(Kor-2)は4,250±30yrBP、床面からの炭化材(Kor-7・9)はそれぞれ4,190±30yrBP、4,070±30yrBPという結果が得られた(付篇参照)。床面のⅢ群b類土器と年代測定から縄文時代中期後半と判断する。

(袖岡淳子)

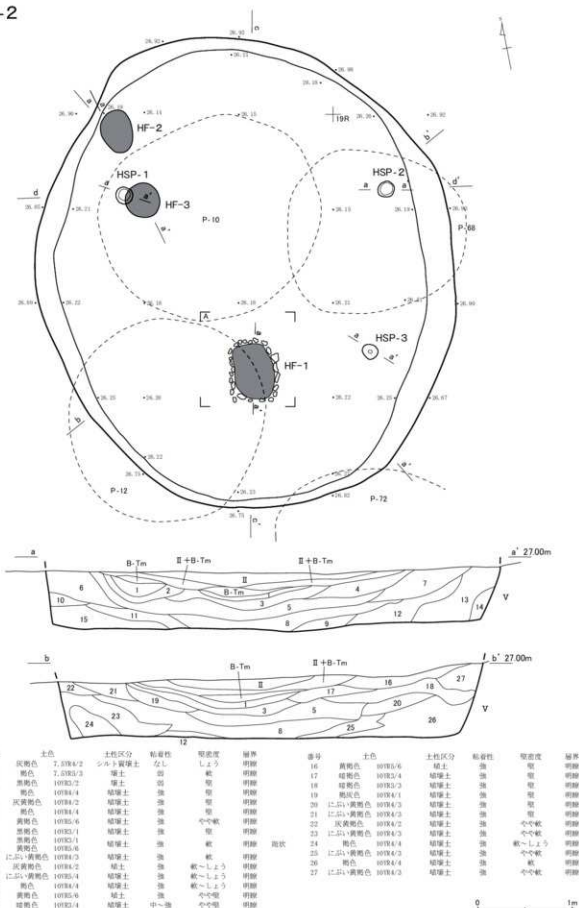
H-3

位置 17U・17V・18U・18V **規模** 5.88×5.05/5.22×4.61/0.98 m

平面形 不整の楕円形

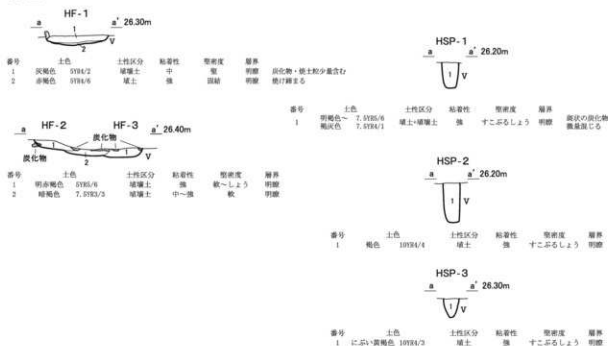
確認・調査 住居跡南側部分を平成29年度、住居跡北側壁際部分を平成30年度に調査した。平成29年度は、ポンクレ川に面した段丘の縁辺の18U・18V区で、表土除去後の精査によりB-Tmが縞状に混じる黒色～黒褐色土のまとまりを確認した。東西と南北方向に直交する土層観察用のベルトを設定して掘り下げた。床面は、確認面から約1 m掘り込まれたV層最下層からVI層上面に構築され、壁際から中央部へとやや

H-2

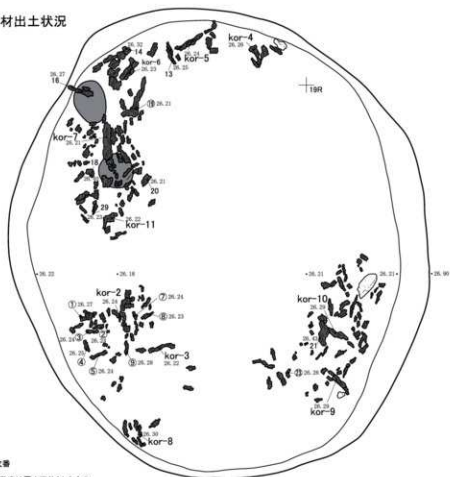


図IV-3 H-2(1)

H-2



H-2 炭化材出土状況



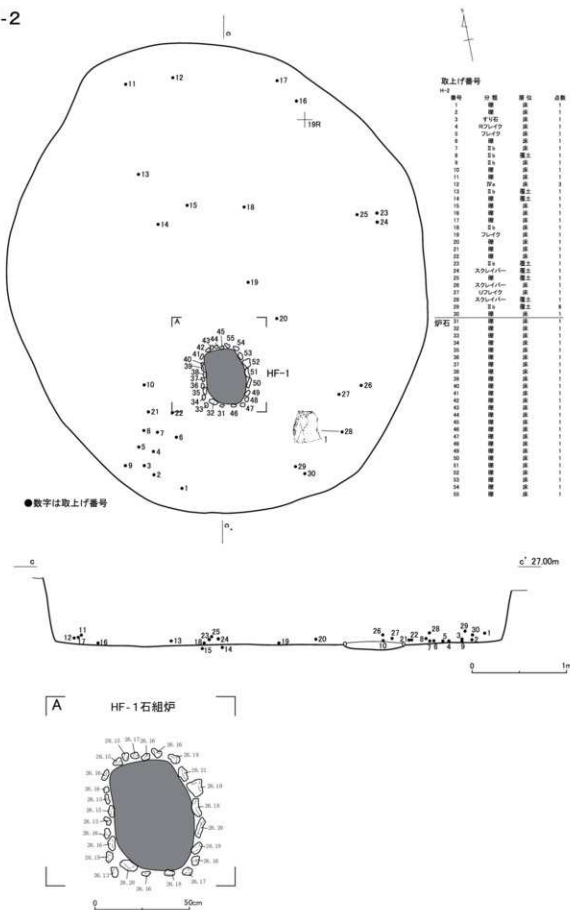
※ 26-27-28は欠番

※ ○数字は床、数字は覆土下位としたもの

※ Korは炭種同定・放射性炭素年代測定の実験番号

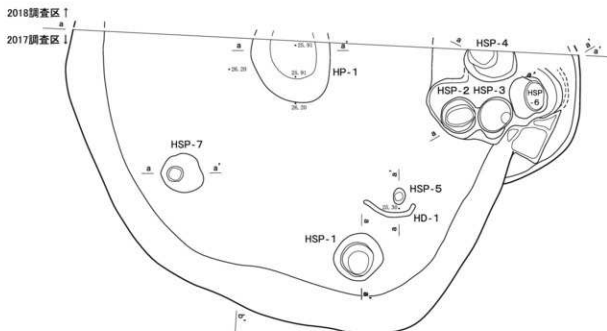
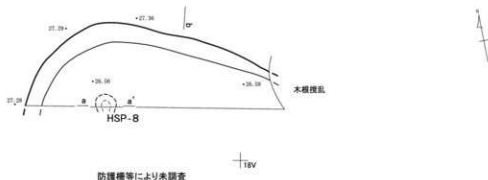
図IV-4 H-2(2)

H-2

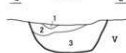


図IV-5 H-2(3)

H-3



HP-1 a-a' 26.40m



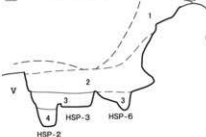
番号	土色	土性区分	堅固度	
1	暗褐色 10YR3/4	硬礫土	しまり良い	V粒と炭化物多量 底土粒少量
2	黄褐色 10YR5/6	硬礫土	しまり良い	黒色土ブロック状 炭化物少量
3	暗褐色 7.5YR3/4	硬礫土	ぼそぼそ	Vローム粒 炭化物少量

HSP-1 a-a' 26.50m



番号	土色	土性区分	粘着性	堅固度	
1	褐色 10YR4/4	硬礫土	強	しまり良い	底床に類似
2	明褐色 7.5YR5/6	硬礫土	強	しまり良い	
3	明褐色 7.5YR5/6	硬礫土		ぼそぼそ	白色粒子多量

HSP-2・3・6 a-a' 27.10m



番号	土色	土性区分	粘着性	堅固度	
1	明褐色 10YR6/6	硬礫土	—	ぼそぼそ	底層土
2	褐色 10YR4/4	硬礫土	—	極めて	炭化物少量
3	灰褐色 10YR5/6	硬礫土	—	しまり良い	炭化物少量
4	明褐色 7.5YR5/6	硬礫土	強	ぼそぼそ	白色粒子多量

0 1m

図IV-6 H-3(1)

傾斜する。床面には貼床が施され、東側（川側）の壁際の貼床上には、粘土質の土壌で階段状の出入口施設が造られている。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。

平成30年度の調査では、安全面の理由から平成29年度調査範囲の境まで掘り進めず、住居跡の中央から北側1.5m程は未調査となった。北側の壁の立ち上がりを確認し、V層面で床面を確認した。

覆土 床面には厚さ約10cmの貼床（覆土6層）が施され、住居跡東側の壁際では、覆土5・4層で階段状施設が作られる。貼床上部には炭化物や遺物を含んだ暗褐色土（覆土3層）が堆積し、その上部の黄褐色～暗褐色土（覆土1・2層）は壁上部から住居跡中央部まで凹状に厚く堆積する。この層は北側の盛土遺構Cの盛土の可能性がある。覆土1の上部はI～III層の自然堆積層で、B-TmやK-o-dが少量認められた。

付属遺構 土坑（HP）1か所、柱穴（HSP）8か所、溝状遺構（HD）1か所、集石（HS）1か所、階段状遺構1か所を確認した。

HP-1は住居跡中央で確認した。断面形はやや深い皿状で、覆土には少量の焼土粒や炭化物が混じる。坑底面付近からは礫や剥片などが出土した。HSPは、配置や深さからHSP-1・2・4・7・8が主柱穴と考えられる。HSP-4は階段状遺構に埋められおり、HSP-7は上部から集石HS-1が落ち込むような状態で検出された。HSP-5とHD-1はHSP-1東側に近接する。HD-1は幅約5cm、深さ約3cmで、平面形はHSP-5を半周囲むような「C字状」の形状である。HS-1はHSP-7の上面で、直径10cmを超える棒状礫・たたき石が9点まとまって確認されたものである。

階段状出入口とした施設は、HSP-2・3・4・6を埋め戻し、さらに貼床面より約10cm高く盛土し、第1の段を作り出す。その上に明褐色粘土で盛土して第2の段を作出した後、住居跡の壁から住居跡外へと階段状に掘り込みながら3～5段の段を作り出している。出入口構造と考えられる。

遺物出土状況 遺物はII群b類土器116点、スクレイパー7点、たたき石6点、扁平打製石器5点、剥片69点など279点が出土した。遺物は比較的少なく、覆土10・13層から散発的に出土する。土器は復元土器（図V-8-5）も含め、円筒土器下層d2式である。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。

（熊谷仁志・愛場和人）

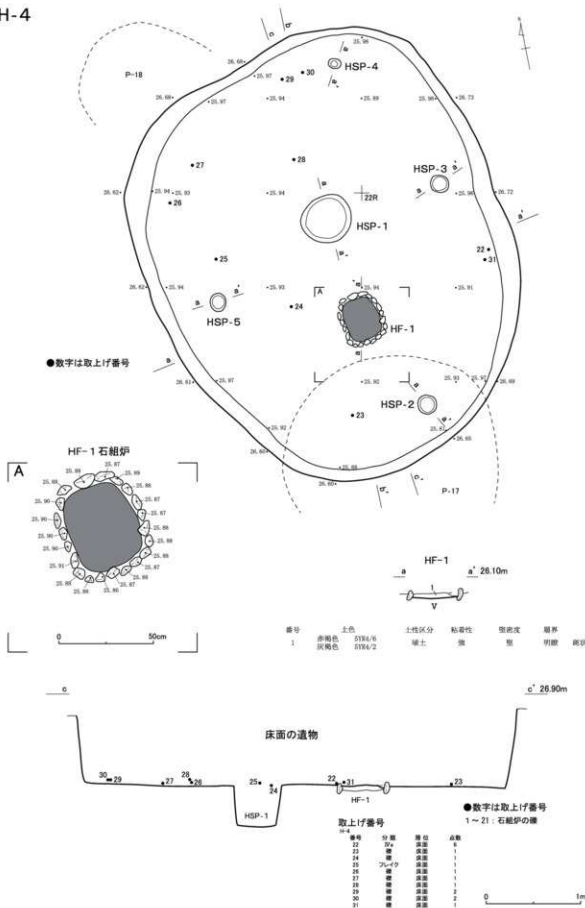
H-4

位置 21Q・21R・22Q・22R **規模** 4.60×3.81/4.37×3.51/0.69m **平面形** 不整の楕円形
確認・調査 無名沢とポンクレ川の間にある沢地形に面した南西向きの平坦面に位置する。表土除去後にV層面でB-Tm火山灰と黒褐色土の広がりを確認した。土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査と並行しながら平面的に掘り下げていったところ、平坦な床面に石組炉、急で明瞭な壁の立ち上がりを検出し、住居跡と認定した。

覆土 27層に分層した。上面はII層とB-Tm層、上位の覆土1～4・19・20・23層はII・III層土や周辺からの流れ込みによる層とみられる。これより下位はV層のローム質土が主体の土層で、掘り上げ土の流入や屋根材の土などが推測される。

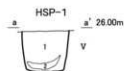
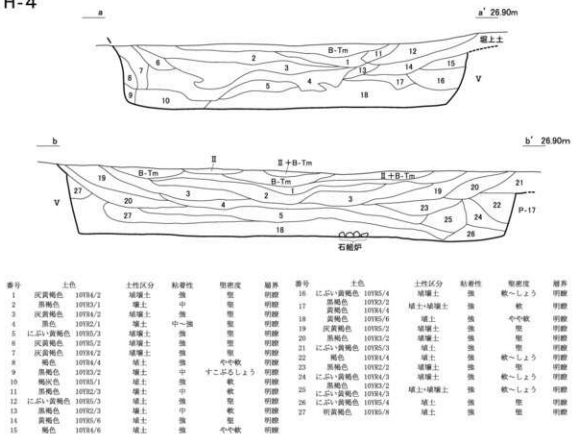
付属遺構 石組炉（HF）1か所、柱穴（HSP）5か所を確認した。住居平面の長軸はほぼ南北方向で、床面の中央より南側にHF-1がある。HF-1の石組は長方形で、住居の長軸上にある。石組は扁平な礫の長辺が石組の縁辺になるように、床面を石の幅分掘り込んで埋設している。礫は被熱し、石組の内側には赤褐色土と灰褐色土が斑状で、焼け締まった面がある。HSP-1は、住居の長軸上やや北側で確認した。平面形は円形、深さは40cm程の主柱穴と考えられる。HSP-2・3・5は、直径が20cm前後で、深さは短軸方向にあるHSP-3・5が20cm前後、長軸南側のHSP-2が30cm程で、いずれも底面は平坦である。覆土はローム質土主体のものが多く、堅密度はすこぶるしょうである。HSP-4は直径13cm、

H-4



図IV-9 H-4 (1)

H-4



番号	土色	土性区分	粘着性	堅硬度	層界
1	褐色 10YR4/4	硬粘土	強	堅	明瞭
2	黒褐色 10YR3/2	硬粘土	強	しろう	明瞭



番号	土色	土性区分	粘着性	堅硬度	層界
1	褐色 10YR4/4	硬粘土	強	すこぶるしろう	明瞭



番号	土色	土性区分	粘着性	堅硬度	層界
1	にぶい黄褐色 10YR4/3	硬粘土	強	すこぶるしろう	明瞭



番号	土色	土性区分	粘着性	堅硬度	層界
1	褐色 10YR4/4	硬粘土	強	すこぶるしろう	明瞭
2	黒色 10YR1.7/3	硬粘土	強	すこぶるしろう	明瞭

0 1m

図IV-10 H-4 (2)

●数字は取上げ番号

●数字は取上げ番号

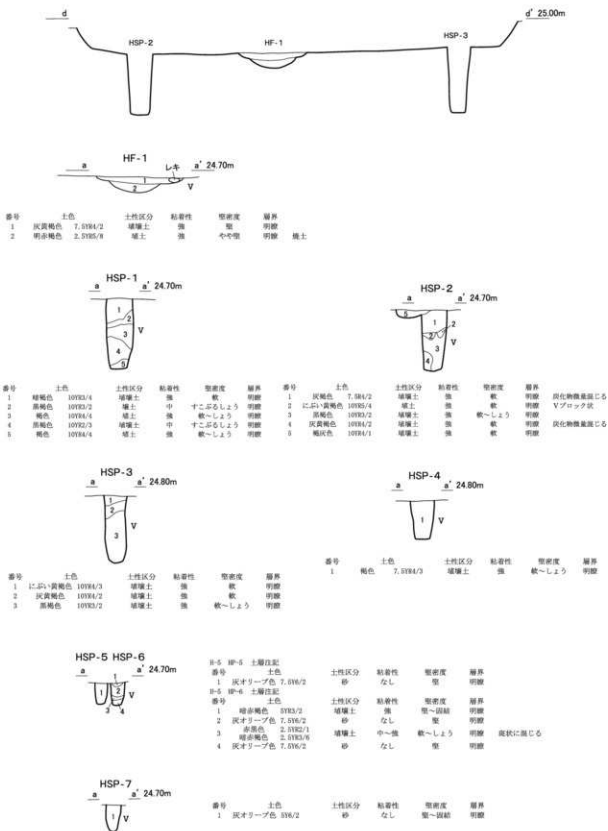
●数字は取上げ番号

番号	土色	土性区分	粘着性	堅密度	層界
1	黄褐色 10YR5/8	埴土	強	軟	明瞭
2	灰褐色 10YR3/1	埴土・埴壤土	強	軟	明瞭 腐炭
3	褐色 10YR4/4	埴壤土	強	軟	明瞭
4	灰黄褐色 10YR4/2	埴壤土	強	軟	明瞭
5	灰褐色 10YR3/1	埴壤土	強	軟	明瞭
6	にじみ・黄褐色 10YR4/3 ～褐色 10YR4/6	埴壤土	強	軟	明瞭 少量炭灰質土・少量じり
7	暗褐色 10YR3/2	埴壤土	強	軟	明瞭
8	暗褐色 10YR3/2	埴壤土	強	やや硬	明瞭
9	にじみ・黄褐色 10YR5/4	埴壤土	強	やや硬	明瞭
10	暗赤褐色 10YR3/6	埴壤土	強	軟	明瞭 焼土

●数字は取上げ番号

34

H-5



図IV-12 H-5(2)

深さ 10 cm と小型で、底面は丸みを帯びる。

遺物出土状況 遺物は覆土中からはⅡ群b類土器6点、Ⅲ群b類土器2点、スクレイパー2点、剥片25点、礫30点など、床面からⅢ群b類土器6点、剥片1点、礫10点、HF-1の石組の礫21点の計107点出土した。覆土出土のⅡ群b類土器片は、重複している土坑由来のものである。

時期 縄文時代前期後半の土坑を切つて構築しているため、それより新しい。床面からⅢ群b類土器が出土していること、同じ形態の石組炉を有するH-2から縄文時代中期後半である。

H-5

位置 21 J・21 K 22 J・22 K **規模** 4.98×4.49/4.63×4.24/0.42 m **平面形** 楕円形

確認・調査 包含層調査でV層上面に黄褐色～黒褐～灰黄褐色土の広がりを確認した。土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査と並行し平面を下げたところ、平坦な床面と明瞭な壁の立ち上がりを検出し、住居跡と認定した。

覆土 10層に分けた。覆土1層は黄褐色ローム質土が主体で、近隣の遺構が盛土遺構に由来するものと推測する。覆土2～5層は自然堆積で、それより下位は屋根土、または掘り上げ土などの流れ込みと考えられる。

付属遺構 炉跡1か所(HF-1)、覆土中の焼土(HF-2)、柱穴4か所(HSP-1～4)、砂ビット3か所(HSP-5～7)を確認した。

HF-1は住居跡ほぼ中央の地床炉で、床面で灰黄褐色土と一部明赤褐色土のまとまりとして検出した。半載したところ、明赤褐色の焼け締まった浅い掘り込み面を検出した。HF-2は長径26 cmの小型の焼土で、北壁近くの覆土下位層で確認した。HSP-1～4は主柱穴で、地床炉を中心に四方にある。HSP-1・2は平面と底面、深さが似ており、HSP-3は71 cmと深く、HSP-4は形状がHSP-1・2と共通している。HSP-5～7はHF-1やその近くから検出された砂ビットで、HSP-5・7は灰オリーブ色の固結した砂が詰まっており、HSP-6は灰オリーブ色の砂と焼土混じりの黒～暗褐色土が交互に入っていた。

遺物出土状況 覆土からはⅡ群b類土器180点、焼成粘土塊3点、石鏃1点、石槍・ナイフ1点、スクレイパー12点、剥片107点、たたき石3点、礫84点など404点、HF-1や周辺の床面からはⅡ群b類土器69点、スクレイパー1点、剥片10点、礫1点の81点、合計485点出土した。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層c式である。

時期 床面とHF-1付近からⅡ群b類土器片(図V-8-7)が出土し、該期の堅穴式住居の類例にみられる床面の砂ビットが検出されていることから縄文時代前期後半の住居跡である。HF-1から得られた炭化物(Kor-12)で放射性炭素年代測定と樹種同定を行ったところ、¹⁴C年代は4,190±30yrBP、樹種はクリという結果であった。年代測定値は調査結果より新しい値である。(袖岡)

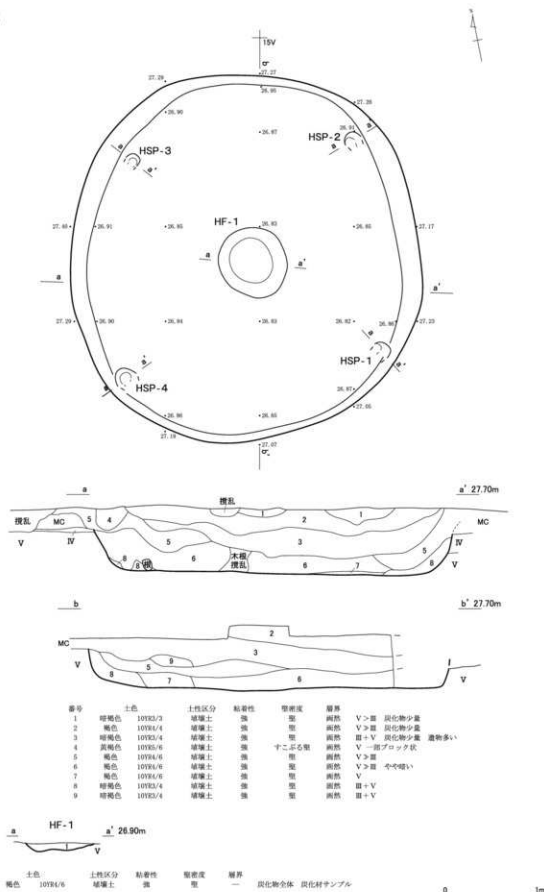
H-6

位置 15 U・15 V **規模** 3.90×3.77/3.66×3.34/0.48 m **平面形** 円形

確認・調査 補償道路北側地区の盛土遺構MCを調査中、V層面で暗褐色土層のまとまりがみられたため、中央を通る十字の土層観察用ベルトを設定し、トレンチを先行させながら周辺を掘り下げた。床面と壁の立ち上がりを確認し、堅穴住居跡と判断した。炉跡HF-1では炭化材が少量検出したため、これを採用し、放射性炭素年代測定と樹種同定を行った(付篇参照)。

覆土 覆土は9層に分けた。黄褐色、褐色、暗褐色などいずれもV層主体の土層で、土質は固く締まる。

H-6



図IV-13 H-6(1)

覆土上位(覆土1~3)では炭化物が少量まじり、覆土3層を中心に遺物が多く出土する。住居廃絶後、あまり時間を置かずにMCの盛土により埋められ、最終的には周囲も含め20cm程盛土されている。なおH-6は、IV層面から掘り込まれており、周辺のIII層黒色土は住居構築時には削平されていたものとする。

付属遺構 炉跡(HF)1か所、柱穴(HSP)4か所を確認した。

HF-1は住居跡中央に位置する。長径77cmの皿状の掘り込みがあり、覆土には褐色の焼土と炭化材がみられるが、坑底面に被熱層はない。HSP-1~4は4本の主柱穴で、いずれも壁際に位置する。直径は14~23cmで、深さは58~77cmである。

遺物出土状況 盛土遺構MCが本住居跡を埋めていると考え、住居内の遺物はH-6の遺物として扱った。覆土中の遺物は4,150点で、II群b類土器が2,893点と最も多く、剥片825点、礫404点と続く。床面の遺物はスクレイパー2点、扁平打製石器1点、北海道式石冠1点、剥片3点と少量である。II群b類土器は円筒土器下層c式の破片が1点あるが、円筒土器下層d1~d2式が主体である。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。MCにより埋められるため、これより古い。HP-1覆土の炭化物(Kor-27)について放射性炭素年代測定を行ったところ、¹⁴C年代が4,700±30yrBPという結果が出た。炭化材の樹種はクリである(付篇参照)。

H-7

位置 16V・17V **規模** 5.57×(2.15)/5.41×(2.02)/0.81m **平面形** 円形か楕円形

確認・調査 盛土遺構MCのトレンチ調査時に段丘縁の16V区で、黒褐色土の広がりがみられたため、トレンチを先行させ、黒褐色土以下を掘り下げた。床面とほぼ垂直に立ち上がる壁を確認し、堅穴住居跡と判断した。H-7の東側は調査区外で、西側の約半分を調査したことになる。住居跡東側の調査区外は崖地形で急斜面となっており、概ね崩落し、残存していない。覆土下位出土の炭化材については樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。

覆土 覆土は17層に分層した。覆土8層は窪みに形成されたIII層黒褐色土である。覆土8層より上の覆土1~7・15層は盛土遺構MC起源の盛土層、覆土9~14・16・17層は壁際が厚く、中央へと薄くなる屋根土などの崩落土と考えられる。覆土8層より上位の土層には遺物や炭化材が多く含まれる。

付属遺構 柱穴(HSP)6か所を確認した。

柱穴はHSP-4が深さ12cmと浅い以外は、深さ46~65cmと深いものである。HSP-3・5・6は覆土上部に固く締まった褐色粘土がみられ、埋め戻された可能性がある。HSP-1・2はいずれも最も西側に位置し、覆土は埋め戻しではない。住居の拡張などに伴いHSP-5からHSP-1、HSP-3・6からHSP-2へと柱が建て替えられた可能性がある。

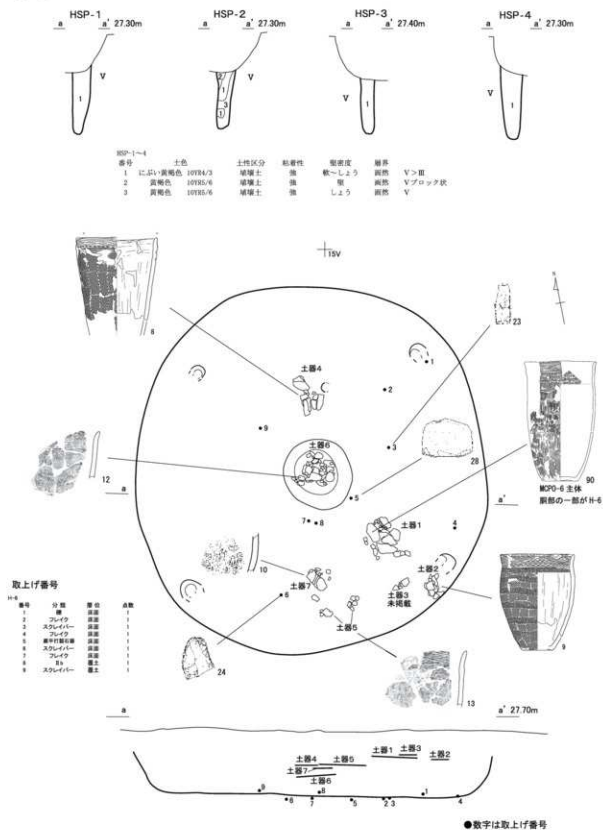
遺物出土状況 盛土遺構MCが本住居跡を埋めていると考え、住居内の遺物はH-7の遺物として扱った。覆土中からは剥片2,451点、II群b類土器329点、礫168点など2,971点が出土した。このうち床面からはII群b類土器3点(摩耗)、石鏃1点、スクレイパー4点、たたき石1点、剥片23点と少量である。II群b類土器は円筒土器下層b式、円筒土器下層式d1式、円筒土器下層d2式がある。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。土層の観察から住居廃絶後、ある程度埋没してからMCの盛土で埋められている。覆土下位出土の炭化材(Kor-28)の放射性炭素年代測定では、¹⁴C年代が5,950±30yrBP、縄文時代前期初頭という想定より古い結果が出た。また樹種はコナラである(付篇参照)。

H-8

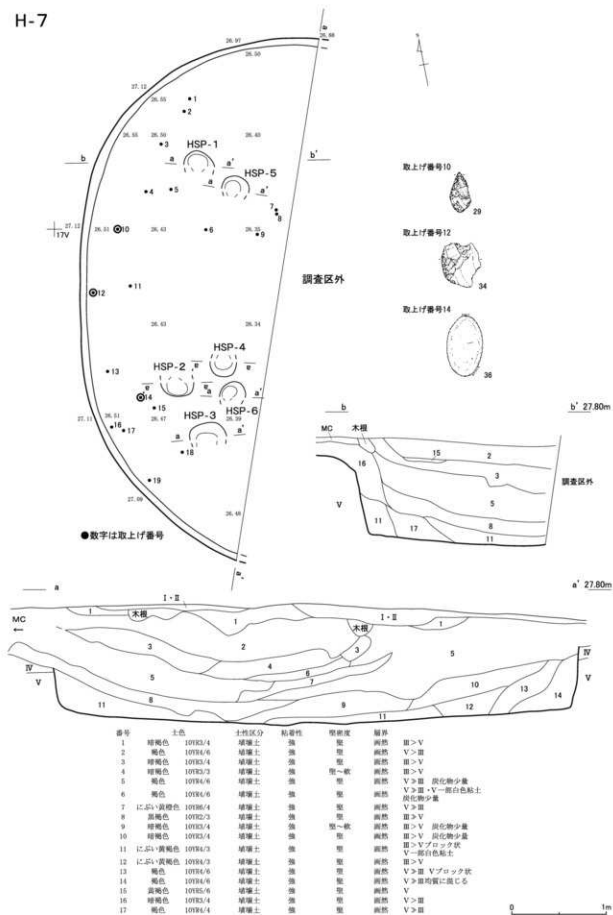
位置 30U・31U **規模** 6.08×(2.80)/5.97×(2.70)/0.83m **平面形** 円形か楕円形

H-6



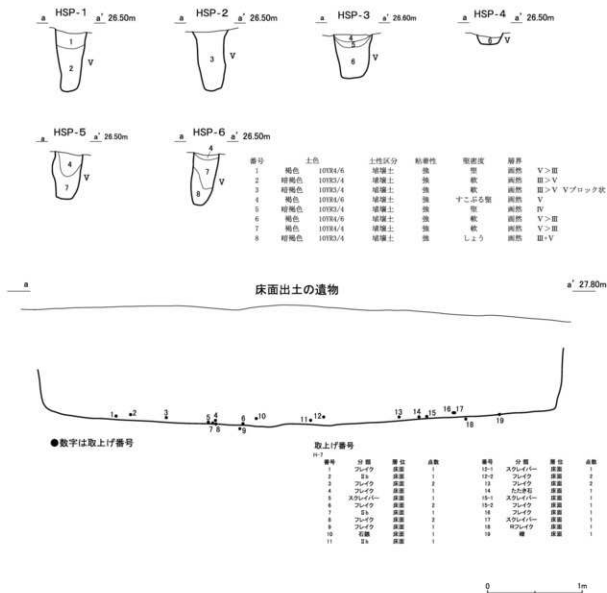
図IV-14 H-6(2)

H-7



図IV-15 H-7(1)

H-7



図IV-16 H-7(2)

確認・調査 補償道路南側地区では、V層上面に褐色の盛土層（盛土遺構MD）が南側に広い範囲にあり、トレンチを先行させながら、盛土を掘り下げた。30 U・31 U区ではV層面よりも下位にMD盛土層が広がる範囲があり、この土層をトレンチ状に掘り下げたところ、V層面から70～80 cm下に平坦な床面と壁の立ち上がりを確認し、堅穴住居跡と判断した。住居跡の南東側は調査区外で、住居跡の北西側半分程度を調査したことになる。覆土下位出土の炭化材については炭化樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。

覆土 覆土は5層に分層した。上位の一部に黒褐色土（覆土1）、暗褐色土層（覆土2）がみられるほかは、褐色のV層主体土層（覆土3～5）で、厚く堆積する覆土4層は固く締まった土層である。いずれの土層も遺物は少量である。

付属遺構 砂ピット（HSP-1～3）3か所、柱穴（HSP-4・5）2か所を確認した。

HSP-1～3は直径16～20 cm、深さは8～10 cmの小土坑で、灰オリーブ色を呈する砂質土が充填されていた。柱穴はHSP-4が直径34 cm、深さ48 cmで、HSP-5が直径21 cm、深さ10 cmで、配置から主柱穴と考えられる。

遺物出土状況 盛土遺構MDが本住居跡を埋めていると考えるが、住居内の遺物はH-8の遺物として扱った。覆土からはⅡ群b類土器669点、つまみ付きナイフ3点、スクレイパー5点、剥片120点など959点である。床面からは、Ⅱ群b類土器6点、剥片7点、鏝3点の計16点と少量である。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層c式と円筒土器下層d 2式があり、床面では円筒土器下層c式の小破片がみられた。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。覆土の状況から堅穴住居跡廃絶後、すぐにMDに埋められたものとする。覆土中の炭化物（Kor-29）について放射性炭素年代測定を行ったところ、 ^{14}C 年代が $4,790 \pm 30\text{yrBP}$ という結果が出た。また樹種はクリである（付篇参照）。

H-9

位置 9 S・9 T・10 S・10 T・10 U・11 T **規模** $8.57 \times (5.80) / 8.33 \times (5.75) / 1.02\text{ m}$

平面形 隅丸長方形

確認・調査 補償道路北側地区の包含層調査後、V層面でⅢ層黒色土が楕円形に広がる範囲がみられ、南北方向と東西方向の十字に土層観察用ベルトを設定し、トレンチを先行させながら周辺を掘り下げた。床面と壁の立ち上がり、ベンチ構造を確認し、堅穴住居跡と判断した。炉跡HF-1の焼土上面では炭化材がみられたため、これを取り出し、炭化樹種同定と放射性炭素年代測定を行った（付篇参照）。

住居跡の北西角と南東側は調査区外で、住居跡の7割程度を調査したことになる。

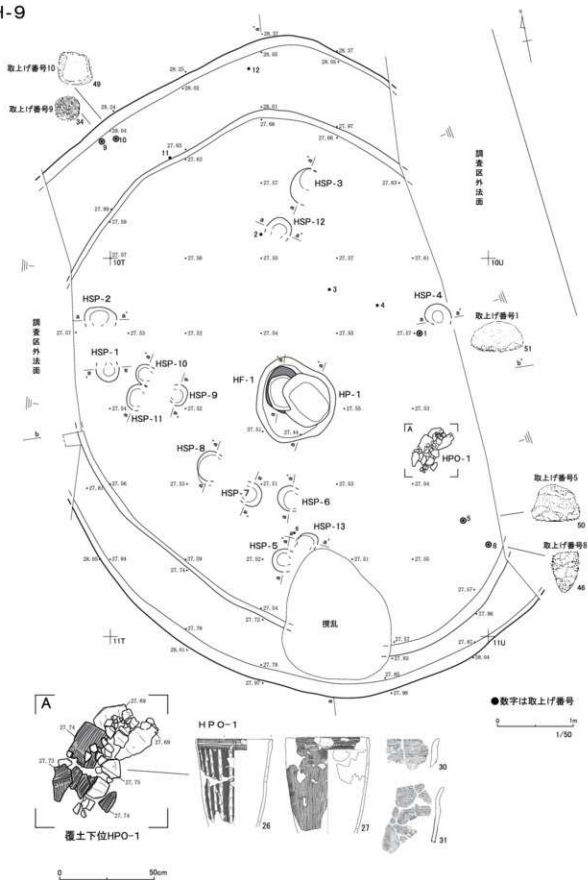
覆土 覆土は7層に分層した。覆土1層がⅢ層起源の黒褐色土の他は、覆土2～7はV層主体の褐色土層、暗褐色土層である。覆土2以下はV層起源の均質な土層で、住居跡周囲には盛土層は確認できなかったが、H-6～8・10同様、住居跡を埋める行為が行われている可能性がある。

付属遺構 炉跡（HF）1か所、土坑（HP）1か所、柱穴（HSP）13か所を確認した。

HF-1は長径1.13 mの皿状の掘り込みがあり、掘り込みの北側には直径47 cm、深さ27 cmの小土坑がみられる。小土坑内には上から褐色粘土、灰オリーブ色の砂質土、橙色の焼土、暗褐色土が堆積する。その堆積上部には焼土が形成されており、これを炉跡の焼土とした。焼土の南側は土坑HP-1により壊されている。HP-1は平面形が長径70 cmの隅丸長方形、深さ76 cmで、V層起源のにぎい黄褐色土、褐色土で埋め戻されている。

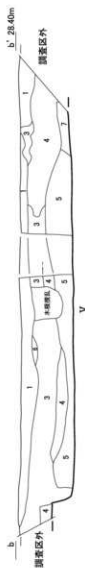
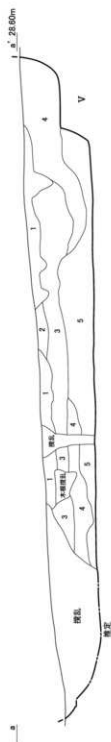
柱穴はHSP-2・1・10・11・9・8・7・6・5・13が住居跡の東側、HSP-3・12・4が西側で列状に検出された。HSP-6・7・12・13は深さが8～16 cmと浅く、それ以外は深さが55～94 cmと深いものである。HSP-1・3・5・6・9・10・13は、V層起源の固く締まった粘土で埋め戻されており、

H-9

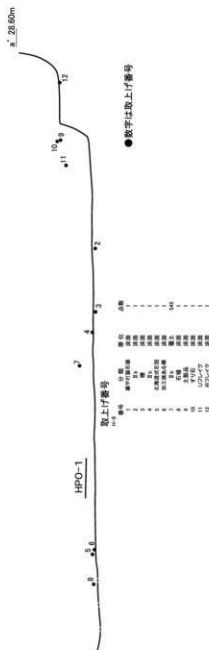


図IV-18 H-9 (1)

H-9



番号	土色	土質区分	結核性	埋没度	層系
1	暗褐色	19735/4	強	強	層・IV
2	～黄褐色	～19732/3	強	強	埋没 V>IV
3	褐色	19734/4	強	強	埋没 V>III 褐色粉少層
4	暗褐色	19735/6	強	強	埋没 V'埋
5	褐色	19734/6	強	強	埋没 V'
6	褐色	19734/4	強	強	埋没 V'埋
7	褐色	19734/6	強	強	埋没 V>III 埋没



●数字は取上げ番号

取上げ番号	分層	点別
1	層・IV	埋没
2	埋没 V>IV	埋没
3	埋没 V>III	埋没
4	埋没 V'埋	埋没
5	埋没 V'	埋没
6	埋没 V'埋	埋没
7	埋没 V>III	埋没
8	埋没 V'	埋没
9	埋没 V'埋	埋没
10	埋没 V'埋	埋没
11	埋没 V'埋	埋没
12	埋没 V'埋	埋没

0 5 10

図IV-19 H-9 (2)

柱の建て替えが行われた可能性が高い。柱穴の底面は平坦もしくは丸みを帯びる。ベンチ構造は全周にみられ、住居跡北側では幅が70～90 cmで、床面との段差が30 cm以上あるが、南側では幅が20～50 cm、段差が15～30 cmである。

遺物出土状況 遺物はⅡ群b類土器1,290点、剥片651点、礫840点など計2,839点出土した。このうち床面出土ものはⅡ群b類土器2点、土器片円盤1点、石槍・ナイフ1点、すり石1点、北海道式石冠1点、扁平打製石器1点、剥片1点など12点で、少量である。覆土下位の土器集中HPO-1では円筒土器下層d2式が2個体以上まとまって出土した。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。HF-1の炭化物(Kor-30)について放射性炭素年代測定を行ったところ、¹⁴C年代が4,700 ± 30yrBPという結果が出た。また樹種はクリである(付篇参照)。

H-10

位置 31U・32U **規模** (2.01) × (0.35) / (1.92) × (0.29) / 0.55 m **平面形** 不明

確認・調査 補償道路南側地区の盛土遺構MD調査後、調査区南側境のV層面で褐色のまとまりを確認した。調査区境にわずかに残った褐色土を掘り下げ、壁の立ち上がり、床面を確認し、規模から竪穴住居跡と判断した。竪穴住居跡は北西角の壁付近を調査し、大部分は調査区外に存在する。

覆土 覆土は6層に分層した。上部に暗褐色土(覆土2層)がみられるほかは、V層主体の褐色やにぶい黄褐色土層で、炭化物が少量混じる。近くのH-8同様、盛土遺構MDにより埋められているものと判断する。

付属遺構 なし

遺物出土状況 覆土中からⅡ群b類土器4点、剥片3点、礫6点の計13点出土した。

時期 出土遺物から縄文時代前期後半と判断する。MDに埋められており、これより古い。

(愛場)

3. 土坑

土坑は断面形状が斜め、もしくは垂直に立ち上がるものがP-11・13・18・26・27・34・35・44・47・63・79・84～86・96の15基で、それ以外の87基は断面の形状がフラスコ状の土坑である。P-28・77は欠番である。

フラスコ状土坑の多くは、開口部を確認後、半割せず、半分を底面より広いトレンチ状にスコップ等で掘り下げた。土坑の下位からは移植を使って、遺物を残しながら底面まで掘り下げた。土層断面を記録した後、もう半分を覆土上位から移植(深いものはスコップを使用)で掘り下げ、オーバーハングする上位部分は記録後、安全のため除去していった。このため完掘時には上位部分はなくなり、底面付近のみの形状が残るものが多かった。

P-1

位置 21U・22U 21V・22V **規模** 2.10 × 1.90/2.78 × 2.67/2.12 m **平面形** (坑底面) 不整の円形

確認・調査 表土除去後にV層面でB-Tm火山灰と黒色土のまとまりを確認した。半截したところ掘削深度が2 mより深い土坑と判断し、安全対策を取り段階的に平面と断面を記録し、周辺をトレンチ状に掘り広げながら調査を行った。平坦な坑底面とオーバーハングしながら立ち上がる壁を検出し、フラスコ状土坑と判断した。平面形は、開口部が円形で壁面崩落があり、坑底面は円形である。

覆土 13層に分層した。B-Tmと1～6層は自然堆積、覆土7・8・11・12層は壁面崩落土、9層は

柔らかく密度のない、にぶい黄褐色土が堆積している。坑底面直上には黒褐色の砂質土が堆積していた。

遺物出土状況 覆土の遺物は主に7～9層より上、6層周辺で多く出土する傾向があった。遺物は覆土からⅡ群b類土器335点、焼成粘土塊1点、石槍・ナイフ1点、スクレイパー3点、Rフレイク2点、Uフレイク4点、剥片28点、石核2点、石鋸1点、台石1点、礫41点、石製品1点の計420点出土した。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層d2式が主体である。

時期 覆土からⅡ群b類土器が出土しているため、縄文時代前期後半と考える。

P-2

位置 20 U **規模** 1.85 × 1.47/2.21 × 2.04/1.99 m **平面形(坑底面)** 不整の楕円形

確認・調査 表土除去後にV層面でB-Tm火山灰と黒色土のまとまりを確認した。半載したところ掘削深度が2m近くになる深い土坑と判断し、P-1と同様、段階的に半載・記録し調査を行った。平坦な坑底面と歪にオーバーハングし立ち上がる壁を検出し、フラスコ状土坑と判断した。平面形は開口部が壁面崩落により不正な楕円形、坑底面はややびつな楕円形である。

覆土 19層に分層した。覆土上位のB-Tmと1～3層は自然堆積、覆土4・5層は壁面崩落土である。覆土中位の6～1・2層からは焼土や剥片集中が検出し、土器のまとまりや石器類など遺物が多く出土した。これより下位の覆土7～13層はV層黄褐色ローム主体のにぶい黄褐色土と暗褐色土がほぼ交互に堆積し、覆土14～17・19層はVI層の凝灰岩礫層とV層ローム質土の壁面崩落土、覆土18層はにぶい黄褐色土の堆積である。覆土6層より下位は人為によるものと壁面崩落によるものである。

付属遺構 覆土中位で焼土(PF)2か所、剥片集中(PFC)1か所を検出した。

遺物出土状況 遺物は覆土からⅡ群b類土器137点、焼成粘土塊1点、スクレイパー3点、Rフレイク6点、Uフレイク2点、剥片1,954点(うちPFC-1は1,857点)、石核3点、磨製石斧1点、加工痕ある礫2点、礫24点の計2,133点で、特に覆土中位の覆土6層で多く出土した。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層d2式である。

時期 覆土6層からの遺物と周辺の遺構・遺物などから縄文時代前期後半と判断する。

P-3

位置 20 U **規模** 2.10 × 1.85/2.06 × 1.85/2.13 m **平面形(坑底面)** 不整の楕円形

確認・調査 表土除去後にV層面で黒褐色土のまとまりを確認した。遺構と想定し半載したところ、掘削深度が2mより深い土坑と判断し、P-1・2と同様、段階的に半載・記録し調査を行った。平坦な坑底面と、コの字が対向するようにオーバーハングし立ち上がる壁を検出し、フラスコ状土坑と判断した。

覆土 14層に分層した。覆土1～4層までは自然堆積で、覆土5・6・15層は頸部を充填するように堆積する。覆土8～13層はV層ローム質土主体で、9層を除き、坑口中心部が高く、坑底端に向かって低くなる堆積である。流動性の低い土が、坑口などの高いところから入れられ、円錐形になったものである。この堆積は自然営為によるものではなく、人為的なものと考えられる。

付属遺構 坑底のほぼ中央に小土坑(PP)1基を検出した。

遺物出土状況 遺物はⅡ群b類土器56点、焼成粘土塊1点、スクレイパー3点、Rフレイク1点、剥片10点、石核1点、たたき石4点、加工痕ある礫2点、礫25点の計103点で、このうち坑底面からはⅡ群b類土器が29点、Rフレイク1点、剥片4点、礫9点が出土した。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層d2式である。

時期 坑底面からⅡ群b類土器が出土していることから縄文時代前期後半と判断する。

P-4

位置 21R・21Q 規模 $1.05 \times 0.90/2.03 \times 1.86/1.25$ m 平面形(坑底面) 楕円形

確認・調査 表土除去後にV層面で灰黄褐～褐灰～にぶい黄褐色土のまとまりを確認した。遺構と想定し半截したところ、平坦な坑底面と、鋭角にオーバーハングし頸部で直線状になり、開口部でわずかに開いて立ち上がる壁を検出し、フラスコ状土坑と認定した。覆土中位では遺物が多くみられ、炭化したクリの種実も出土した。

覆土 11層に分けた。坑底面直上には黒褐色土層(11層)が薄く堆積する。その上位の覆土6・8～10層は中心部が厚く、端が薄くなる山形の堆積で、流動性の低い土が坑口などの高いところから入れられ、安息角が生じ円錐形に堆積した土の断面である。覆土6層では遺物がまとまって(図IV-23-47・61)出土した。覆土2～4層は下位の山形の堆積を覆い、開口部から頸部にかけて充填された土と考える。覆土は人為で、開口部から段階的に入れられた土と判断する。

付属遺構 坑底面のほぼ中央に小土坑(P-P)1基を検出した。

遺物出土状況 遺物はⅡ群b類土器132点、スクレイパー1点、Rフレイク3点、Uフレイク2点、剥片36点、石核1点、扁平打製石器1点、原石2点、礫35点、石製品5点の計218点出土した。このうち坑底面では剥片2点、礫13点が点在していた。Ⅱ群b類土器は円筒土器下層d1式が主体で、P-49と接合したものがある。

時期 人為による覆土中のⅡ群b類土器から縄文時代前期後半である。

P-5

位置 21U 規模 $(0.62) \times 0.54/1.26 \times 1.30/1.20$ m 平面形(坑底面) 円形

確認・調査 P-1の調査により土坑の存在を確認した。半截したところ平坦な坑底面とオーバーハングし立ち上がる壁を検出し、フラスコ状土坑と認定した。北側の壁は深く丸みを持った形状で、頸部のくびれは明瞭で、開口部がわずかに開く。南壁はやや鋭角にオーバーハングし、開口部に向かい直線状に窄まっている。

覆土 9層に分層した。覆土は地形の傾斜とは反対の南側が高く、北側が低く堆積している。黒褐色の覆土6層を除き、V層ローム質土が多く含まれる覆土である。覆土は人為と判断する。

付属遺構 坑底面のほぼ中央に小土坑(P-P)1基を検出した。

遺物出土状況 遺物は覆土からⅡ群b類土器76点、剥片20点、石核1点、たたき石1点、原石1点、礫18点の計117点出土した。

時期 時期を判断する遺物の出土は無いが、周辺の遺構・遺物から縄文時代前期後半と考える。

P-6

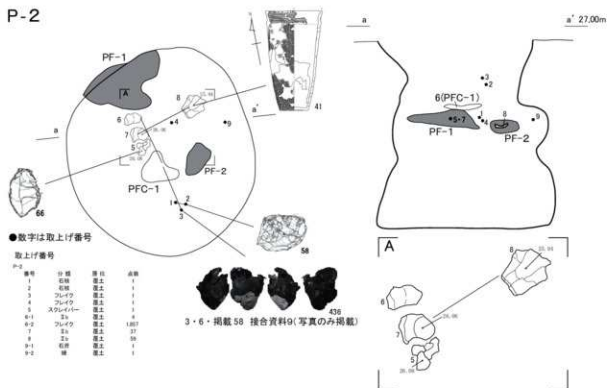
位置 19S・19R 規模 $2.12 \times (1.34)/2.46 \times 2.12/1.29$ m 平面形(坑底面) 不整の楕円形

確認・調査 表土除去後にV層面でB-Tm火山灰と黒褐色土のまとまりを確認した。半截したところ、平坦な坑底面は検出したが、壁の立ち上がりがいびつだったためトレンチ調査を並行し、周辺を広げて精査した。開口部と頸部のくびれが坑底面とずれ、いびつな壁の立ち上がりとなるフラスコ状土坑と判断した。北東壁はP-64と重複していた。

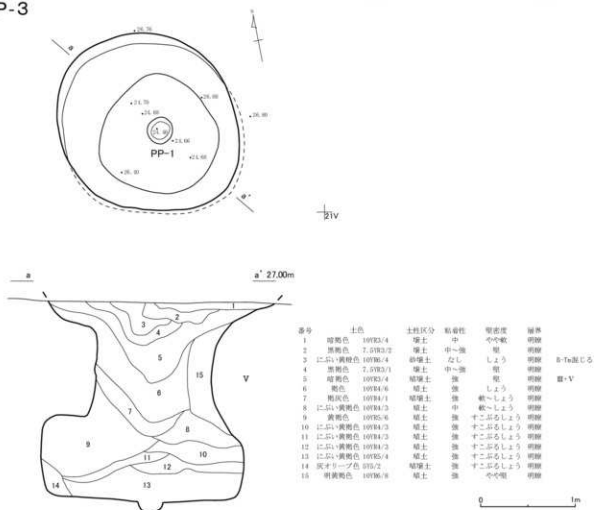
覆土 11層に分層した。B-Tmと覆土1～4層は自然堆積である。覆土上位の4・5層は流れ込みと考えられ、覆土6・7層は焼土が混入した明赤褐色土である。覆土9層は壁面からの剥落土、くびれより下位の覆土8・10・11層は人為による埋め戻し土である。

付属遺構 覆土下位で焼土(P-F)1か所、坑底面の中心よりやや南東側に小土坑(P-P)1基を検出した。

P-2



P-3



図IV-22 P-2(2)・P-3